

九州大学
応用生理人類学
研究センター年報

|| 2017-2018 年度 ||

Physiological Anthropology Research Center
Kyushu University
Annual Report 2017-2018

2017-2018年度

応用生理人類学研究センター年報

III 応用生理人類学研究センター

PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY RESEARCH CENTER



九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

目次

1.	センター長挨拶	1
2.	センターの概要	2
3.	センター主催イベント報告	
	・ Research Colloquium for Young Researchers 2017	3
	・ 講演会「地区防災とレジリエンス」	4
	・ シンポジウム「現代人の環境適応能」	6
	・ 日本生理人類学会第 30 回若手研究者講演会	7
	・ シンポジウム「九州北部豪雨から 1 年を振り返って」	8
	・ Research Colloquium for Young Researchers 2018	10
	・ シンポジウム「人間工学・生理人類学の現在・過去・未来」	11
	・ 講演会「ヒトの適応進化と生活習慣病の接点」	12
	・ その他の共催イベント	13
4.	部門活動報告	
	・ 環境適応部門	14
	・ アクティブライフ部門	16
	・ ヒューマニティ部門	18
	・ レジリエンスデザイン部門	20
5.	構成員研究業績一覧	22
6.	外部研究資金一覧	37

1. センター長挨拶



応用生理人類学研究センター長
前田享史

ごあいさつ

九州大学大学院芸術工学研究院 附属応用生理人類学研究センター（PARC）は、九州芸術工科大学設置以来、長年にわたり行われてきたヒトの生物学的適応に関する基礎研究を土台として、現代生活者が抱える様々な健康リスクを軽減し、ヒトが健康で快適に生活いくための応用研究を推進するために、2014年8月1日に設立されました。本報告書は2017～2018年度の活動記録をまとめたものです。

当センターは環境適応部門、アクティブライフ部門、ヒューマニティ部門、レジリエンスデザイン部門の4つの研究部門から構成されています。

環境適応部門では、ヒトの環境適応能を維持開発しうる物理的環境を探索しています。例えば、暑くも寒くもない中立の快適な温度環境は本当にヒトにとって良い環境なのでしょうか？適応的な動物であるヒトは快適な環境にまで適応してしまいます。快適で温かな環境では本来有している生理機能を発揮することなく生活することが可能となり、結果として生理機能の低下につながります。このことが近年の熱中症増加につながっているのかもしれません。

アクティブライフ部門では、超高齢化社会における介護者の増加や老老介護などの諸問題に対して、それぞれの年齢層や障害の心身機能の特性を生理人類学的な視点から理解して人々をアクティブな生活へと導くことを目指しています。加えて、パワーアシストスーツのようなヒトの負担をアシストするテクノロジーについての研究も進めており、対象となる範囲は広がってきています。

ヒューマニティ部門では現代社会における様々なストレスが人間性（ヒューマニティ）に与える影響について、人間性の進化適応的背景や発達メカニズムを基盤に、行動・生理・心理学的手法を用いて研究を進めています。特にヒトのミラーニューロンシステムの研究や情動の客観的評価手法の研究などを精力的に行っています。

レジリエンスデザイン部門では、ストレスによる歪みを跳ね返す力であるレジリエンスをアシストできる環境やモノを探索しています。特に近年では被災地における被災者へのサポートや避難所環境を対象に、生理人類学を基盤としたレジリエンスデザインを研究しています。

当センターは、現代人が抱える諸問題を解決することにより未来の人類がよりよく生活できるような状態を目指しており、産官学からの社会的要請に対して専門領域の研究者で対応する体制を整えています。本報告書をご一読いただき、ご関心を持たれた方はセンター事務局までお知らせくださいますようお願いいたします。

2. センターの概要

応用生理人類学研究センターの組織構成

当センターは環境適応部門、アクティブライフ部門、ヒューマニティ部門、レジリエンスデザイン部門の4つの研究部門から構成されています。



応用生理人類学研究センターのメンバー

環境適応部門	アクティブライフ部門	ヒューマニティ部門	レジリエンスデザイン部門
安河内 朗	村木 里志	樋口 重和	綿貫 茂喜
前田 享史	大草 孝介	松隈 浩之	尾方 義人
伊藤 浩史	LOH Ping Yeap	平松 千尋	藤 智亮
瀬口 典子(協力研究員)	能登 裕子(協力研究員)	元村 祐貴	縄田 健悟(協力研究員)
		橋瀬 和秀(協力研究員)	山田クリス孝介(協力研究員)
		早川 敏之(協力研究員)	

3. センター主催イベント報告

「Research Colloquium for Young Researchers 2017」

2017 年 9 月 1 日（金）14：00～16：00 九州大学大橋キャンパス 321 教室

開催趣旨

本センターの構成員の一部は芸術工学府芸術工学専攻デザイン人間科学国際コース（博士後期課程）に所属している。当コースでは英語のみで学位が取得できるプログラムを提供している。毎年8、9月には本コースの国際的広報も兼ねたサマースクール（Summer School）を開催している。

本スクールでは、将来本コースに進学を検討している者に対して旅費および滞在費等を支援し、実際に国際コースの授業やラボワーク（研究室活動）を1～2週間体験する機会を提供している。参加者は主に東アジア圏（韓国、台湾など）、東南アジア圏（インドネシア、フィリピン、タイなど）の大学院修士学生や若手大学教員である。そして、センター構成員の研究室においてもラボワークを受け入れている。

前年度と同様、応用生理人類学研究センターが主催となって、サマースクール参加者とセンター構成員の研究室研究員や学生が学術交流できる機会を設けた。双方が自身の大学や研究内容を英語にて紹介し、交流を深めた。

内 容

Research Colloquium for Young Researchers 2017

日時：2017 年 9 月 1 日（金）14:00～16:00

場所：九州大学大橋キャンパス 321 教室

参加者：サマースクール参加者 11 名（韓国 3 名、台湾 1 名、フィリピン 1 名、タイ 2 名、中国 4 名）、九州大学関係 35 名（教員 7 名、学術研究員 2 名、国際コース在籍生 7 名、大学院生・学部生・研究生 19 名）

（プログラム）

- 1) 応用生理人類学研究センターの紹介
- 2) 九州大学関係者による発表 4 件
（デザイン人間科学コース学生による発表 3 件、他大学院生 1 件）
- 3) サマースクール参加者による発表 6 件
（生理人類学講座にてラボワークの者）



写真 1 発表の様子



写真 2 参加者の集合写真

3. センター主催イベント報告

レジリエンスデザイン研究特別講演会

「地区防災とレジリエンス」西澤雅道 福岡大学法学部准教授（内閣府より派遣）

2018年3月6日（火）14:00～17:30 九州大学大橋キャンパス 511・512 教室

講演会概要

九州大学応用生理人類学研究センター レジリエンスデザイン研究特別講演会は以下のように行われた。

日時：2018年3月6日（火）14:00～17:30

場所：九州大学 大橋キャンパス 511 教室・512 教室

主催：九州大学応用生理人類学研究センター

共催：地区防災計画学会、情報通信学会災害情報法研究会、日本生理人類学会

後援：九州大学未来デザイン学センター、九州大学ソーシャルアート・ラボ、九州大学環境設計グローバルハブ、大阪大学大学院医学系研究科コンシリエンスデザイン看護医工学寄附講座

対象者：研究者、大学、行政、教育関係者等防災研究に関心のある方を対象に行った。（入場無料・先着順）

主旨

「九州大学応用生理人類学研究センター」は、人が健康で快適に生活していくための応用研究を行っている機関であり、その中でも、災害時の避難所等におけるストレスを跳ね返す「レジリエンス」を適切に発揮できるように、「レジリエンスデザイン部門」では、場やモノを対象に研究を行っている。

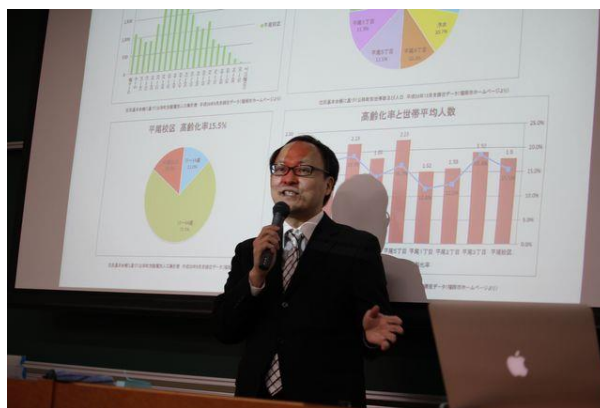
基調講演

基調講演では、東日本大震災後に、内閣府で「災害対策基本法」改正を担当し、「地区防災計画制度」を企画立案した西澤雅道 福岡大学法学部准教授等を招き、「地区防災とレジリエンス」の在り方について検討した。

西澤雅道（にしざわ まさみち）

福岡大学法学部准教授（内閣府より派遣）

1973年生まれ。中大法卒。専門は公法・行政学。1999年総理府・総務庁に入り、総務省総合通信基盤局事業政策課課長補佐、内閣広報室総括補佐、内閣府大臣官房総務課企画調整官等を経て2016年4月より現職。内閣府防災担当時代に地区防災計画制度を創設。地区防災計画学会会長代理。



基調講演：西澤雅道



会場の様子

第1部 レジリエンスデザイン研究特別講演会

「はじめに 生理人類学とレジリエンス」

前田享史 九州大学応用生理人類学研究センター長
九州大学芸術工学研究院教授

「基調講演 地区防災とレジリエンス」

西澤雅道 福岡大学法学部准教授（内閣府より派遣）
金 思穎 日本学術振興会特別研究員（DC2・専修大学）

「災害とレジリエンスアシストサービス」

尾方義人 九州大学芸術工学研究院准教授

「おわりに」

鶴野玲治 九州大学芸術工学研究院副院長
九州大学芸術工学研究院教授

第2部 防災研究事例検討発表会

「社会実装とレジリエンスデザイン研究について」

座長：藤 智亮 九州大学芸術工学研究院

「避難所での心理的負担を軽減するための防災教育の基礎的検討」

岸田文 九州大学大学院統合新領域学府
太田将太郎 九州大学大学院統合新領域学府
綿貫茂喜 九州大学芸術工学研究院

「避難所環境で想定される低温低湿度が脳活動に与える影響」

黒田知宏 九州大学大学院統合新領域学府
綿貫茂喜 九州大学芸術工学研究院准

「ICT を活用した避難所の状況把握のためのシステム」

亀岡瑠璃 九州大学大学院芸術工学府
藤 智亮 九州大学芸術工学研究院

「災害対策における実務担当者としての保健師のレジリエンス行動の抽出」

西村英伍 九州大学大学院芸術工学府
近藤聖樹 九州大学大学院芸術工学府
柴田英俊 九州大学大学院芸術工学府
尾方義人 九州大学大学院芸術工学研究院

「能動的活動の有無を評価する生理指標の検討」

中島孝明 九州大学大学院芸術工学府
綿貫茂喜 九州大学芸術工学研究院



ICT を活用した避難所の状況把握のためのシステム



能動的活動の有無を評価する生理指標の検討

3. センター主催イベント報告

シンポジウム

「現代人の環境適応能 ～生理人類学の視点から～」

2018年3月17日（土）13:00～15:00 九州大学大橋キャンパス 511 教室

開催主旨

応用生理人類学研究センターでは、環境適応部門を有しており、人類の環境適応能が精力的に研究されてきた。このシンポジウムでは、これまで様々な視点から行われてきた環境適応研究について紹介するとともに、今後の更なる環境適応研究の発展を期待して企画されたものである。

シンポジウム内容

応用生理人類学研究センター環境適応部門の安河内教授による「生理人類学の歴史と現代人の環境適応性について」の基調講演では、生理人類学研究の歴史とその時代背景、そして、今後必要となる環境適応能研究の方向性について、ご講演いただいた。その後、4名のシンポジストにより光環境への適応（樋口教授）、遺伝子レベルから個体レベルでの適応（工藤教授）、循環調節機能からみた立位への適応（石橋准教授）、寒冷環境への適応（前田教授）について、研究が紹介され、生理人類学の視点から見た環境適応能について議論された。



基調講演時の会場の様子

基調講演

「生理人類学の歴史と現代人の環境適応性について」

安河内 朗先生(九州大学大学院芸術工学研究院・教授)

シンポジウム

1. 「光環境への生体リズムの適応」

樋口重和先生(九州大学大学院芸術工学研究院・教授)

2. 「マルチスケールで環境適応を捉える」

工藤奨先生(九州大学大学院工学研究院・教授)

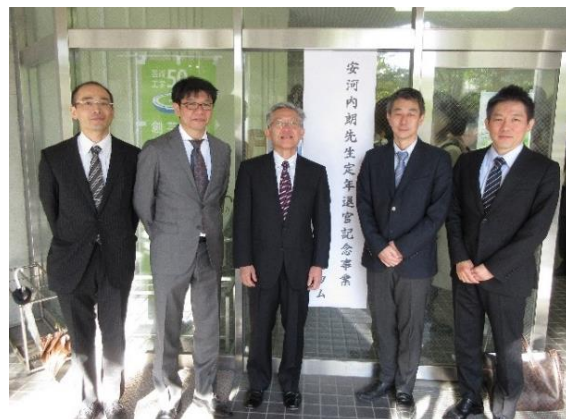
3. 「生理人類学の視点から起立性循環調節を考える」

石橋圭太先生(千葉大学大学院工学研究院・准教授)

4. 「寒冷環境への適応」

前田享史先生(九州大学大学院芸術工学研究院・教授)

尚、本シンポジウムは、当センター環境適応部門を牽引されてきた安河内朗教授（現名誉教授）の退官記念事業との共催として開催された。



講演者とシンポジスト

3. センター主催イベント報告

日本生理人類学会第 30 回若手研究者講演会

平松千尋先生（九州大学） 「生き物の目を通して見る世界」
伊藤浩史先生（九州大学） 「数理でせまる概日リズムと温度の関係」
関 元秀先生（九州大学） 「進化や生物学は「人間」をどこまで説明できるか？」

2018 年 6 月 15 日（金） 16:00～18:30 九州大学大橋キャンパス 524 教室

日本生理人類学会若手の会と共催で日本生理人類学会第 30 回若手研究者講演会を 2018 年 6 月 15 日（金）16:00～18:30 に、九州大学大橋キャンパス 5 号館 524 教室にて開催しました。（参加者数 42 名）九州大学の平松千尋先生、伊藤浩史先生、関元秀先生の九州大学の若手 3 名の先生方にご講演いただきました。

平松先生からは「生き物の目を通して見る世界」というタイトルで、現在取り組んでいらっしゃる霊長類色覚研究の内容と、学生時代の研究手法であったフィールドワークの様子についてご紹介いただきました。その中で、霊長類の色覚については、狭鼻猿類ではオスとメスで 2 色覚と 3 色覚に分かれるが、色覚の違いによる採食行動の違いは見られなかったという内容などをご紹介いただきました。



平松千尋先生のご講演

伊藤先生には「数理でせまる概日リズムと温度の関係」というタイトルで研究紹介をしていただきました。体内時計を数理モデルに落とし込むと、周期は変わらないが振幅が小さくなる「ポップ分岐」として説明できること、

定期的な温度変化が振幅を増大させるきっかけになる可能性があることなどをご紹介いただきました。



伊藤浩史先生のご講演

関先生からは「進化や生物学は「人間」をどこまで説明できるか？」というタイトルでご講演いただきました。サルにおいて多夫一妻、一夫一妻などの集団維持戦略の違いがみられるが、それについて数理モデルを適用し、現実には観察されない夫婦形態をとったと予測した場合に繁殖が成立するかどうかといった検討する、という手法についてご紹介いただき、詳しい内容についてご講演いただきました。各先生のご講演に対してフロアから多くの質問もあり、盛会にて終了しました。



会場の様子

2018 年度第 1 回地区防災学会シンポジウム

「九州北部豪雨から 1 年を振り返って

～ 九州北部豪雨の教訓と地域防災力の在り方～」

2018 年 7 月 28 日（土）13:00～17:00 九州大学大橋キャンパス 多次元デザイン実験棟

講演会概要

九州大学応用生理人類学研究センター レジリエンス

1 シンポジウム「九州北部豪雨から 1 年を振り返って」 @九州大学 大橋キャンパス 概要

40 名以上の死者・行方不明者を出し、記録的な短時間での降雨による災害が残した教訓には多様なものがあつた九州北部豪雨から 1 年が経過したタイミングで、西澤（内閣官房企画調整官、前福岡大学法学部准教授）及び綿貫（九州大学芸術工学研究院教授）により、九州福岡での本シンポジウムが企画された。本シンポジウムでは、九州北部豪雨の教訓を踏まえたコミュニティや企業による地域防災力の強化や地区防災計画づくりの在り方について考えるということを中心に、九州大学芸術工学研究院応用生理人類学研究センターレジリエンスデザイン部門により計画・実行された。

シンポジウムプログラムは以下のとおりである。

日時：2018 年 7 月 28 日（土）13:00～15:00

場所：大橋キャンパス多次元デザイン実験棟

プログラム：

尾方義人 九州大学芸術工学研究院准教授
室崎益輝 神戸大学名誉教授（地区防災計画学会会長）
矢守克也 京都大学防災研究所教授
（地区防災計画学会副会長）
加藤孝明 東京大学生産技術研究所准教授
林 秀弥 名古屋大学大学院法学研究科教授
縄田健悟（集団心理学）福岡大学人文学部講師
前田享史（環境人間工学）九州大学芸術工学研究院教授
藤 智亮（機能工学）九州大学芸術工学研究院准教授
朝廣和夫（緑地保全学）九州大学芸術工学研究院准教授
中村美亜（芸術社会学）九州大学芸術工学研究院准教授
西澤雅道 内閣官房企画調整官

パネルディスカッション：「地区防災の本質と多様性」

司会：西澤雅道

パネリスト：室崎益輝、矢守克也、加藤孝明、林 秀弥、朝廣和夫、中村美亜、尾方義人

開催校挨拶

前田享史 九州大学芸術工学研究院応用生理人類学研究センター センター長

17:15～ エキスカーション：九州大学環境適応研究実験施設の見学

2 シンポジウム概要「芸術工学の視座から」

九州大学の大橋キャンパスは、九州大学芸術工学部の前身の九州芸術工科大学のキャンパスであり、1960 年代当時、技術の人間化をキーワードとし開学した。人間に対して様々な事柄を対象にデザインを行っている。防災や減災に対しての研究も盛んで、様々な分野での研究がなされている。

今回のシンポジウムでは、九州大学からの発表は特に人間のレジリエンスからの調査や研究報告が見られた。応用生理人類学研究センター レジリエンスデザイン部門では、レジリエンスやそのキー要素となるストレスと以下の図のように位置づけている。

シンポジウムでは、まず尾方から、本シンポジウム趣旨と芸術工学と災害に係る概要や前述のレジリエンスデザインやストレスとの関係についての概説があつた。

3 芸術工学と地区防災計画

その後、九州大学の教員からの報告があり、それを以下示す。

前田は、生理人類学・環境人間工学の立場から「災害避難所における人体への影響について、環境要因からうけるストレスと免疫機能に着目した研究事例について紹介した。災害避難所で入浴が制限されることや冬季の低湿度環境が、ストレス増加と唾液中に分泌される免疫物質である分泌型免疫グロブリンAの減少を引き起こす事について言及し、研究事例から足湯や加湿による災害避難所の環境改善がストレス減少・免疫機能向上をもたらす。」と述べた。

藤は、機能工学・設計工学の立場から、ICT を利用した避難所の人数把握・物資管理に関して、「発災時、行政の避難所運営業務の負担がかなり大きい。負担軽減のためには ICT 技術の導入が有効で、これにより行政の負担が軽減すれば、保健衛生や復興支援など細かな部分に配慮が行き届く。」と述べ、顔認証を用いた人数把握の方法と、QR コードを利用した物資管理の方法を具体的に示した。今後の実用化が期待される。」と述べた。

朝廣は、緑地保全学の立場から「農業ボランティア展開について報告した。福岡県八女市黒木町では、1997 年頃から、農家と都市住民による里地・里山保全を NP0 活動としててんかいしていた。その経験は平成 24 年 7 月九州北部豪雨における農業支援・農地等復旧支援ボランティアにつながり、星野村、うきは市に展開し、その後も、平成 28 年熊本地震、平成 29 年 7 月九州北部豪雨において各地で展開に至った。今後、防災の一環として平時における農村保全活動の実装が期待される。」と述べた。

中村は、芸術社会学の立場から「芸術文化活動を通した共助のケアの可能性について報告した。東日本大震災、熊本地震、九州北部豪雨に関わる取り組みを紹介しながら、これまでは祈りや願いの表現、資金集めが目的とされてきたが、成功事例を検証していくと、そこにはトラウマからの回復プロセスを非言語表現活動で支えるという仕組みがあることがわかってきた。災害後に文化活動を自粛するのではなく、共助のケアとして積極的に活用するノウハウを共有していく必要がある。」と述べた。



会場・発表の様子

4 シンポジウムを終えて、防災と芸術工学

本シンポジウムは、研究者・行政関係者・地域自治会・一般・学生など多様な約 120 人の参加があった。また KBC 「スーパー J チャンネル」 RKB 「報道特集」、毎日新聞、朝日新聞、西日本新聞、共同通信などでの報道があり大変多くの方々へ知られることとなった。地区防災計画実現に向けては様々なアプローチや課題があることは周知のことであったが、今回のシンポジウムを通し、芸術工学など他の人間を考える専門分野との連携の重要性を抽出できた。更に芸術工学からも社会構想設計としての防災デザインの可能性を見出すことができた。



パネルディスカッションの様子

3. センター主催イベント報告

「Research Colloquium for Young Researchers 2018」

2018年9月7日（金）14:00～16:00 九州大学大橋キャンパス シアタールーム

開催趣旨

本センターの構成員の一部は芸術工学府芸術工学専攻デザイン人間科学国際コース（博士後期課程）に所属している。当コースでは英語のみで学位が取得できるプログラムを提供している。毎年8、9月には本コースの国際的広報も兼ねたサマースクール（Summer School）を開催している。

本スクールでは、将来本コースに進学を検討している者に対して旅費および滞在費等を支援し、実際に国際コースの授業やラボワーク（研究室活動）を1～2週間体験する機会を提供している。参加者は主に東アジア圏（韓国、台湾など）、東南アジア圏（フィリピン、タイなど）の大学院修士学生や若手大学教員である。そして、センター構成員の研究室においてもラボワークを受け入れている。

前年度と同様、応用生理人類学研究センターが主催となって、サマースクール参加者とセンター構成員の研究室研究員や学生が学術交流できる機会を設けた。双方が自身の大学や研究内容を英語にて紹介し、交流を深めた。

内 容

Research Colloquium for Young Researchers 2018

日時：2018年9月7日（金）14:00～16:00

場所：九州大学大橋キャンパスシアタールーム

参加者：サマースクール参加者10名（韓国3名、台湾1名、フィリピン2名、タイ2名、中国2名）、九州大学関係28名（教員5名、学術研究員2名、国際コース在籍生5名、大学院生・学部生・研究生16名）

（プログラム）

- 1）応用生理人類学研究センターの紹介
- 2）九州大学関係者による発表5件
（デザイン人間科学コース学生による発表3件、他大学院生2件）
- 3）サマースクール参加者による発表7件
（生理人類学講座にてラボワークの者）

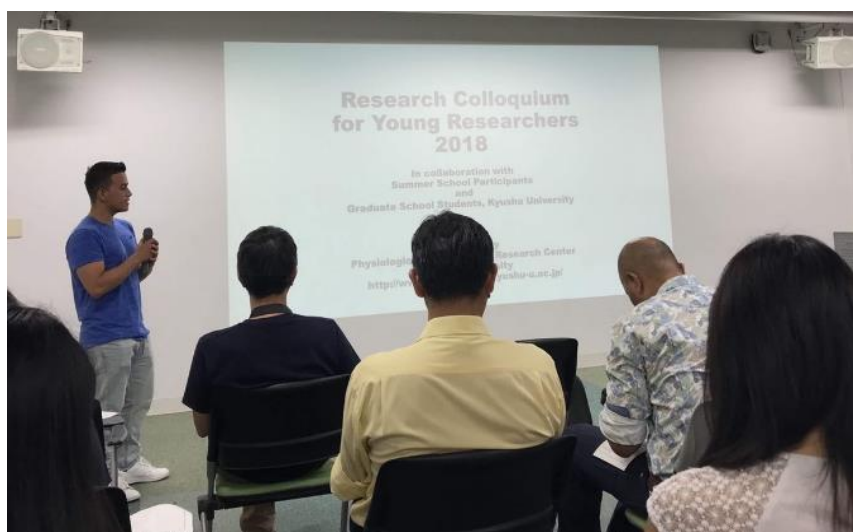


写真1 セミナーの様子

3. センター主催イベント報告

シンポジウム

「人間工学・生理人類学の現在・過去・未来」

2019年3月9日（土） 学士会館（東京都千代田区神田錦町 3-28）

開催主旨

生理人類学は、人類学的視座をもって現代を生きる人間を生理的に探究する学問分野である。また、人間工学は現代における人間を取り巻く諸問題を解決するための学際的分野であり、生理人類学同様、ヒトを対象としている。このシンポジウムでは、生理人類学と関連の深い人間工学分野も含めて、人間工学・生理人類学分野のこれまで行われてきた内容をもとに未来の人間工学・生理人類学の在り方について議論するために企画されたものである。

シンポジウム内容

プレゼンターとして、勝浦哲夫先生（千葉大学名誉教授、前日本生理人類学会会長）、吉武良治先生（芝浦工業大学教授、日本人間工学会理事長）、小林宏光先生（石川県立看護大学教授）に加え、当センターの村木里志先生（九州大学大学院芸術工学研究院教授）から話題提供を頂いた。各先生からは昔から現在に至るまでの研究内容や研究生活などについて、写真などを交えながらお話を頂き、最後に未来の人間工学・生理人類学について議論した。司会は、当センターの樋口重和先生（九州大学大学院芸術工学研究院教授）が務めた。

尚、本シンポジウムは、九州大学芸術工学部（旧九州芸術工科大学）の人間工学教室の創立 50 周年事業との共催として開催された。人間工学教室の 50 年間の卒業論文、修士論文、博士論文の数はそれぞれ、492 編、287 編、78 編を数え、学術論文の数は 690 編であり、また、研究職や教育職に就く卒業生が多いのも特徴といえる。初代人間工学教室教授の佐藤方彦先生（元日本生理人類学会会長）にもご臨席頂き、50 年の歴史を感じる良い機会となった。応用生理人類学研究センターの歴史はまだ 5 年である（2014 年 8 月 1 日設立）。今後は人間工学教室の発展と共に、センターのさらなる発展も期待したい。



集合写真



シンポジウムの様子



懇親会の様子

第9回講演会

「ヒトの適応進化と生活習慣病の接点：肥満と飢餓と寒冷適応を中心に」

中山一大先生（東京大学大学院新領域創成科学研究科 准教授）

2019年3月18日（月）13:00～15:00 九州大学大橋キャンパス 322 教室

開催主旨

生理人類学の学問分野では現代人の環境適応能を評価し、人類にとって最適な環境を探索する研究が数多くなされている。人類が約700万年の進化の歴史の中で経験し、そしてその環境に対して適応的に進化してきた結果として獲得してきた適応能が、現代人に受け継がれていると考えられている。これらのことは人体周囲の気温や光、空気質などの環境要因のみならず、食環境にまで拡張することができる。気温や食環境へのヒトの適応的な進化と現代人が抱えるさまざまな疾病との関連性を考えることは、現代人や近未来の人類の健康あるいは健康的な生活を構築する上で非常に重要なことであるといえよう。

以上のことから、当センターでは、ヒトが進化の過程で遭遇した飢餓や寒冷環境に焦点をあて、それらに対する適応的進化（飢餓や寒冷に遭遇することで得られた様々な生理機能とその適応的な意義）と現代人が抱える肥満を代表とする生活習慣病との関連性について最新の知見を提供することを目的として「人の適応進化と生活習慣病の接点：肥満と飢餓と寒冷適応を中心に」と題す

る講演会を実施した。これらの関連性から、我々人類にとって有用な肥満予防や健康寿命の延伸などに応用することができるだろう。

また、講演会に引き続き日本生理人類学会体温調節研究部会との共催でポスターセッションを実施した。

招待講演

「ヒトの適応進化と生活習慣病の接点：肥満と飢餓と寒冷適応を中心に」中山一大先生（東京大学大学院新領域創成科学研究科先端生命科学専攻人類進化システム分野）

ポスターセッション

1. ボルネオ島在住ルングス族における踏み台昇降運動時の心拍数と皮膚温の変化. 西村貴孝（長崎大学）
2. 低酸素環境下における事象関連電位とミトコンドリア DNA ハプロタイプの関連. 本井碧、黒田知宏、岸田文、西村貴孝、綿貫茂喜（九州大学他）
3. Effects of Relative Humidity on Secretory Immunoglobulin A and Cortisol in Saliva. Maeda T（九州大学）
4. Effects of Bathing on the Variation in Blood Pressure in the Elderly and the Young Male. Ruan L, Hashiguchi N, Koga H, Nonaka T, Maeda T（九州大学他）
5. 常圧低酸素環境下での二酸化炭素付加が P300 に与える影響. 矢野雅人、前田享史（九州大学）
6. 運動前の身体冷却が暑熱下運動時の生理反応及び精神作業成績に及ぼす影響. 鶴菌祥太、前田享史（九州大学）
7. 寒冷環境における局所加温が精神作業成績および生理応答に及ぼす影響. 神田拓摩、前田享史（九州大学）



中山先生のご講演の様子

3. センター主催イベント報告

その他の共催イベント

日本生理人類学会 平成 29 年度研究奨励発表会（九州地区）

日時：2018 年 2 月 3 日 14:00-17:00

場所：九州大学大橋キャンパス 5 号館 511 教室

主催：日本生理人類学会

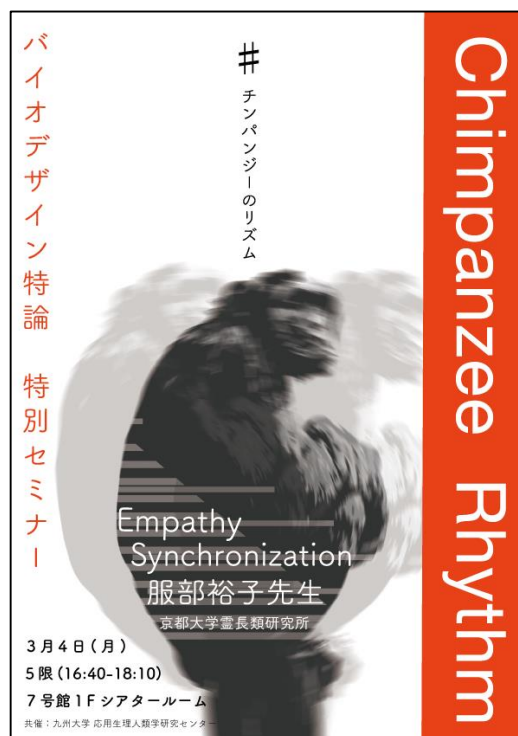
- 1-1. キャンプ経験が子どもの社会的スキルに与える影響, 伊藤瑞恵, 西村悠貴, 池田悠稀, 樋口重和 (九州大・芸工)
- 1-2. 機械学習によるレジリエンス行動の抽出方法の研究, 西村英伍, 辻本寛治, 藤田萌花, 中島孝明, 江頭優佳, 能登裕子, 藤智亮, 尾方義人, 綿貫茂喜 (九州大・芸工)
- 1-3. 反応課題実行時の主観的眠気と脳活動との関係についての研究, 山先亮介, 吉田尚央, 樋口重和 (九州大・芸工)
- 1-4. 3 色覚者と 2 色覚者の色-温度関連づけ, 森優希, 平松千尋 (九州大・芸工)
- 1-5. 創造的活動時の発想に対する評価を反映する生理指標の検討, 中島孝明, 西村英伍, 江頭優佳, 尾方義人, 藤智亮, 綿貫茂喜 (九州大・芸工)
- 1-6. 伸展負荷時の肺胞上皮細胞内サーファクタント輸送と細胞骨格, 山中涼太郎, 万田周一郎, 世良俊博, 工藤奨 (九州大・工)
- 2-1. 周波数解析による寒冷血管拡張反応の多様性に関する研究, 上杉武蔵, 中島悠輔, 世良俊博, 工藤奨 (九州大・工)
- 2-2. 寒冷血管拡張反応に低圧・低酸素が及ぼす影響, 岡坂拓哉, 前田享史 (九州大・芸工)
- 2-3. 高濃度人工炭酸泉浴の身体冷却効果に関する研究 ―渦流浴による検討―, 田中佑季, 本田実結, 藤森加奈恵, 田井村明博 (長崎大・環)
- 2-4. 高濃度人工炭酸泉下腿浴中の心拍変動解析, 本田実結, 田中佑季, 藤森加奈恵, 田井村明博 (長崎大・環)
- 2-5. 入浴が高齢者の血圧変動に及ぼす影響, 阮麟然, 樋口暢子, 林政伸, 古賀弘子, 野中隆, 前田享史 (九州大・芸工)
- 2-6. 気温と湿度が唾液中分泌型免疫グロブリン A とコルチゾールに与える影響, 茂木賢太, 前田享史 (九州大・芸工)

バイオデザイン特論 特別セミナー 「チンパンジーのリズム」

講師：服部裕子先生（京都大学霊長類研究所）

日時：2019 年 3 月 4 日 16:40-18:10

場所：九州大学大橋キャンパス 7 号館シアタールーム



特別セミナー「チンパンジーのリズム」ポスター

4. 部門活動報告

環境適応部門

講演会・発表会の開催

シンポジウム「現代人の環境適応能～生理人類学の視点から～」(2018年3月17日、九州大学大橋キャンパス): センター主催のシンポジウムを企画・実施した。

基調講演: 安河内朗(九州大学)「生理人類学の歴史と現代人の環境適応性について」

シンポジウム: 樋口重和(九州大学)「光環境への生体リズムの適応」、工藤奨先生(九州大学)「マルチスケールで環境適応を捉える」、石橋圭太先生(千葉大学)「生理人類学の視点から起立性循環調節を考える」、前田享史(九州大学)「寒冷環境への適応」

第9回応用生理人類学研究センター特別講演会(2019年3月18日、九州大学大橋キャンパス): センター主催の第9回講演会を企画・実施した。

中山一大先生(東京大学)「ヒトの適応進化と生活習慣病の接点: 肥満と飢餓と寒冷適応を中心に」

環境適応部門研究発表会(2019年3月18日、九州大学大橋キャンパス): 環境適応部門主催の研究発表会として、日本生理人類学会体温調節研究部会との共催でポスターセッションを実施した。7演題の発表があった。

九州山口沖縄リズム研究会(2018年4月7日、福岡市科学館): 当部門は共催として研究会を企画・実施した。

第一部(一般公開): 谷村禎一(九州大学理学研究院)「ショウジョウバエの体内時計の分子機構」、佐竹暁子(九州大学理学研究院)「植物の体内時計・植物が何年かに一度一斉に花を咲かせるしくみ」、竹村明洋(琉球大学理学研究科)「サンゴ礁にすむ生物の月周リズム」、樋口重和(九州大学芸術工学研究院)「ブルーライトがこどもに与える影響・シフトワークと成人病など諸疾患の関係」、安尾しのぶ(九州大学農学研究院)「食事リズムなどの食習慣と体内時計および関連疾患との関係」

第二部: 江藤太亮(九州大学大学院統合新領域学府)「日中の光暴露が子どもの瞳孔の対光反射に及ぼす影響」、大橋路弘(九州大学芸術工学部)「実生活におけるL-Serine 摂取が概日リズムの光同調に及ぼす影響」、福田裕美(福岡女子大学)「光暴露が及ぼす食事誘発性熱産

生への影響と体格との関係性に関する研究」、谷口栄望(九州大学大学院生物資源環境科学府)「日長が神経可塑性に及ぼす影響とそのメカニズムの解析」、服部歩実(九州大学大学院生物資源環境科学府)「骨格筋のグルココルチコイド受容体が情動行動や神経可塑性に及ぼす影響」、伊藤浩史(九州大学大学院芸術工学研究院)「冬の概日リズム」、関元秀(九州大学大学院芸術工学研究院)「概日リズムはどうやって生まれてきたか」、金子健陽(九州大学大学院芸術工学府)「高速分裂するシアノバクテリア」、楠諒彦(九州大学大学院芸術工学府)「ケンサキイカ色素胞の光応答」

国際交流

英国ラフバラ大学との交流(2017年9月12日～15日)(前田享史・安河内朗): 研究交流協定校である英国・ラフバラ大学(Loughborough University) デザインスクールおよび環境人間工学研究室を視察訪問した。ラフバラ大学では Design School を見学するとともに、当部門と関連深い環境人間工学研究室(George Havenith 教授)を訪問して実験室を視察した。大学院生と教員から実験設備や研究内容についての説明を受け、意見交換を行った。また、Havenith 教授と、今後の協力体制について議論した。



英国・ラフバラ大学環境人間工学研究室の George Havenith 教授による研究室紹介

・米国ハワイ大学マノア校との交流(2018年9月25～30日)(瀬口典子): 2018年9月に米国ハワイ大学マノア校 Center for Japan Studies において招聘講演とハワイ大学マノア校法律大学院でオープンフォーラムを行い、法律大学院生と教員、人類学大学院生と教員、ハワイ先住民研究の大学院生と教員とともにアイヌ遺骨返還問題とハワイ先住民の遺骨返還に関してのオープンフォーラムを行い意見交換を行った。また、ハワイ大学マノア校人類学部 Christopher Bae 教授と the Defense POW/MIA Accounting Agency (DPAA)を訪問して、Dr. John Byrd 所長と戦没者遺骨返還に関しての意見交換を行った。

・中国吉林大学国際生物考古学研究センターの Honorary Research Fellow and Academic committee に任命された(2018-2023)(瀬口典子)

・国際交流を促進するために、タイ・英国・インドネシア・米国・中国・日本で開催された国際会議等において精力的に講演を行った。(詳細は研究業績参照)



米国ハワイ州 DPAA 米国防総省捕虜・行方不明者調査局ー司法人類学ラボ (内部は写真撮影禁止) 2018年9月



International Conference of Occupational Health and Safety (ICOHS2017)でのセッション集合写真
2017年11月



中国吉林大学で開催された Global History of Health Project キックオフコンファレンスでの開会式の様子
2018年5月

受賞 (国際学会)

2nd Poster Presentation Prize (Experimental Physiology & The Physiological Society prize)

Ruan L, Maeda T, Effects of bathing on psychophysiological responses in the elderly and the young males, ICEE2017, 2017年11月

受賞 (国内学会)

優秀発表賞(平成29年度日本生理人類学会研究奨励発表会(九州地区))

茂木賢太, 前田享史, 気温と湿度が唾液中分泌型免疫グロブリンAとコルチゾールに与える影響, 2018年2月

優秀発表賞(日本生理人類学会第76回大会)

Vidyarini E, Tsuruzono S, Maeda T, Effect of temperature step changes on physiological responses and mental task performance in Indonesian subjects, 2018年10月

社会貢献

企業講演: 株式会社ノーリツ(開催日 2017年9月27日): 「身体を温めることによる免疫力向上」の題目で講演(前田享史)

研究指導・研究相談: 気圧と生理反応(家電製造業企業)(前田享史)、暑熱時の熱中症(私立病院・国立大学)(前田享史)、暖房方式と生体負担(住宅設備企業)(前田享史)

環境適応研究実験施設の紹介: 学会参加者(日本生理人類学会、地区防災学会)、海外協定大学教員(オーストラリア・ニューサウスウェールズ大学、フィンランド・アールト大学)、政府機関官僚(文部科学省、内閣府)、国内企業(10件)他

4. 部門活動報告

アクティブライフ部門

部門研究会

アクティブライフ研究会（第3回）の開催

（開催日：2017年9月21日、会場：総合せき損センター（福岡県飯塚市））

障がい者や高齢者の運動、健康、生活、スポーツに関して研究している研究者、企業関係者および学生、計23名（国内から6機関）が集まり、研究成果や計画などの発表（8件）・ディスカッションを行った。また、施設見学（リハビリテーション施設、医用工学研究室）、懇親会を行った。

アクティブライフ研究会（第4回）の開催

（開催日：2018年9月19日、会場：広島文化学園大学（広島県安芸郡））

障がい者や高齢者の運動、健康、生活、スポーツに関して研究している研究者、企業関係者および学生、計23名（国内から10機関）が集まり、研究成果や計画などの発表（12件）・ディスカッションを行った。また、懇親会を行った。尚、本研究会はアダプテッドスポーツ・ライフ科学研究会との共催である。



図1 第3回アクティブライフ研究会（総合せき損センター）



図2 第4回アクティブライフ研究会（広島文化学園大学）

研究の成果・取り組み例

非接触型高精度見守りシステムの開発（大草）

独居高齢者を対象とした見守りシステム開発として、非接触型センサによる転倒検知と血圧検知の研究開発を実施した。転倒検知は従来研究では装着タイプのものが殆どだったが、非接触型センサを用いて高精度の転倒検知（検知精度96%）を可能とした。血圧推定では従来ではカフなどを用いていた血圧測定について、同様に非接触センサでの血圧推定を可能とした。

高齢者の身体感覚をふまえた日常生活動作モニターの提案（能登）

高齢者の運動機能の簡易評価ツールの提案を目的とし、在宅高齢者36名を対象に、日常生活動作モニターの可能性調査を行った。課題運動時の動作軌跡とウェアラブルセンサによるモニターのデータ適合度および身体感覚との関連性から、各運動機能評価を簡便に実施できる可能性を示した。

デスクワークによる身体負担の対策（Loh）

デスクワーカーの身体的負担を軽減することを目的とし、ワークステーションのデザインやパソコン入力デバイスの研究を行った。オフィスデスク・チェアのデザイン・機能が作業姿勢と身体負担に及ぼす影響を検討した。

体圧分散クッションの製品開発（村木）

株式会社イケヒコ・コーポレーション（本社：福岡県三潁郡大木町）との共同研究にて車いすやイス用のクッション「背中さらっと体圧分散クッション」「お尻さらっと体圧分散クッション」「背中さらっとクッション」「お尻さらっとクッション」の製品開発を支援した。

講演・イベント関係

招待講演「センシングデータの統計解析」（大草）

日本統計学会春季大会（2017年3月5日）の特別セッション「Industry 4.0 時代におけるIoTとセンシングデータ」にて招待講演を行った。

講演「身の回りのモノ・環境の工夫で生活・健康が変わる！」

2017年7月31日に広島文化学園大学対人援助研究センターの公開講座において講演を行った。

公開講座「アクティブライフのための運動教室」の開催（村木、Loh）

2017年度に春夏期（4月～9月、計10回）、秋冬期（10月～2月、計10回）、2018年度に春夏期（4月～9月、計10回）、秋冬期（10月～2月、計10回）を大橋キャンパス体育館内にて開催した。地域高齢者約20名を対象として、健康運動を軸としたアクティブな生活を実践するための指導を行った。

地域住民を対象とした筋年齢測定会（村木）

福岡市早良区保健福祉センター主催

- ・2017年7月7日（福岡市早良保健所）
- ・2017年10月12日（福岡市早良区四箇田公民館）
- ・2018年11月22日（福岡市早良区四箇田公民館）
（一財）熊本県スポーツ振興事業団主催
- ・2017年10月9日（熊本県立総合体育館）
- ・2018年1月10日・3月14日（熊本県立総合体育館）



図3「アクティブライフのための運動教室」の様子

受賞

学会表彰

- ・Best Reviewer Award 2017, Journal of Physiological Anthropology, Loh PY

学会発表（国際）

- ・Best Paper Award, 2017 International Conference of Computational Statistics and Data Engineering, Okusa K & Kamakura T. Statistical Indoor Location Estimation for the NLoS Environment Using Radial Extreme Value Weibull Distribution. Jul 2017

- ・Best of the Best Paper Award, International Symposium on Semiconductor Manufacturing (ISSM) 2018, Okazaki T, Okusa K & Yoshida A. Prediction of the Number of Defects in Image Sensors by VM using Equipment QC Data. Dec 2018
- ・Best Presentation Award, 5th SEANES International Conference on Human Factors and Ergonomics in South-East Asia, Loh PY, Takesue S, Yeoh WL, Muraki S. A short review on the anatomy and biomechanics for grasp and pinch. Dec 2018

学会発表（国内）

- ・日本人間工学会九州・沖縄支部第38回支部大会・優秀発表賞. シリアスゲーム開発を目的とした異なるリズムにおける足踏み運動の検討（2017年12月）
- ・日本人間工学会九州・沖縄支部第39回支部大会・優秀発表賞. 両側等尺性肘関節屈曲運動におけるアシスト時の筋活動の特徴（2018年11月）
- ・日本人間工学会第58回大会・最優秀研究発表奨励賞. 靴着用時における歩行中の足甲接触圧の経時変化（2017年12月）

国際交流・活動

海外大学との交流等

- ・インドネシア、ムスリムインドネシア大学 (Universitas Muslim Indonesia) 科学工学部を訪問、国際学会 (ICon-ITSD2017) にて招待講演（2017年10月25～26日）（村木）
- ・インドネシア、セベラスマレット (Universitas Sebelas Maret) 芸術デザイン学部にて講演、ワークショップ開催、国際学会 (REKA2018) にて招待講演（2018年9月25～26日）（村木）
- ・中国、厦門理工大学経済管理学院にて招待講演（2018年11月15日）（村木）
- ・ベトナム・ハノイ市にて One-day Ergonomics Seminar（2018年11月27日）（村木、Loh）
- ・中国、武漢理工大学芸術設計学部にて特別講演、Distinguished Professor (特聘教授) 称号付与（2019年3月13日）（村木）

4. 部門活動報告

ヒューマニティ部門

研究紹介

1. 他者動作観察時の脳活動とニューロフィードバック訓練に関する研究（樋口重和、池田悠稀※）※学振特別研究員 DC

他者の動作観察と自己の動作実行の両方で賦活する脳領域はミラーシステムと呼ばれる。ミラーシステムの活動を高めることは動作模倣や動作理解といった動作観察に関わる機能を向上させる可能性がある。本研究では、ミラーシステムの活動を高める手法として、脳波を使用したニューロフィードバックシステムを自作した。フィードバックは、計測した脳波から算出されるミラーシステムの活動状態の値に応じて動画の彩度が変わっていくものとした。この動画を観察しながら、ミラーシステムの活動が高い(動画彩度が高い)状態になるよう訓練を行った。



写真（フィードバック訓練を行う様子）

2. シリアスゲームのヘルスケア利用に関する研究（松隈浩之）

ゲームがもつ積極性、持続性を向上させる用途をリハビリ、ヘルスケアに応用するための研究、制作活動をお

こなっている。主な対象は後期高齢者であり、これまで起立-着席運動や開眼片足立ち、歩行運動を支援するゲームを開発し、高齢者施設等で効果、安全性の検証を実施している。同時に、高齢者がゲームを用いた健康促進活動を実施できる場作りとしてロコモ運動サークルを2015年から継続運営をおこなっている。

2016年から研究の横展開として、小中学校の特別支援学級に在籍する発達障がい児を対象とした特別授業を開始している。今後もさらに研究を深めながら、ゲームを用いての豊かな健康社会構築へと寄与していきたいと考えている。



写真（上：ロコモ運動サークル、下：発達障がい児を対象とした特別授業）

3. 色覚の進化と多様性に関する研究（平松千尋）

当研究室では、進化の過程で生み出される多様性が生命の本質であると捉え、特に色覚の進化と多様性に注目して研究を行っている。哺乳類において2色型色覚が多数派である中、ヒトが属する霊長類では3色型色覚が進化した。3色型色覚は果実採食に適応的であると一般的に考えられてるが、他個体の顔色変化の検出にも有効であることを国際共同研究により実験的に示した。現在、ヒトで顕著にみられる色覚多様性について、遺伝子、知覚、行動、認知、神経活動レベルのアプローチにより総合的な研究を進めている。社会のあらゆる場面で多様性の重要性が指摘されている今日、多様な人間特性の理解の一助となる研究を目指している。



写真（顔色によって繁殖期かどうか分かるアカゲザル
撮影:Constance Dubuc）

4. 乳児期におけるエージェントの垂直的空間配置と社会的地位の関係認知（橋彌和秀）

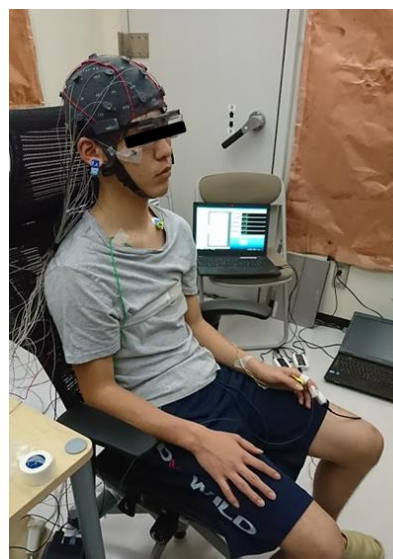
本研究は、孟憲巍（現同志社大学）、中分遥（九州大学／オックスフォード大学）、新田博司（九州大学）、森口祐介（京都大学）の各氏との共同研究である。12-16ヶ月児を対象に、期待違反法をもちいて、「エージェント2個体の垂直的な空間的配置が、両者の社会的関係についての対象児の予測に影響を及ぼすこと」をあきらかにした。具体的には二つのキャラクターが同時に画面上の「高い／低い位置」に出現する場面を繰り返して提示したあと、キャラクターらがひとつの資源（魅力的なもの）を巡って競合し、結果的に一方が手にいれる動画を提示した。その際に、対象児が動画をどのくらい見たかを視線計測装置およびビデオカメラで計測したうえで解析した。結果は一貫して、「下方に提示されたキャラクター」が資源を獲得した結果を示す場面への注視時間が、「上方に提

示されたキャラクター」が勝った場面に比して有意に長いことがあきらかになった。この結果は「(空間的に)上に位置するキャラクターが、競合場面において優位な立場にある」という予測図式が、12-16ヶ月児においてすでに存在する可能性を示す。

Meng, X., Nakawake, Y., Nitta, H., Hashiya, K., & Moriguchi, Y. (2019). Space and rank: infants expect agents in higher position to be socially dominant. *Proceedings of the Royal Society B*, 286(1912), 20191674.

5. 生体情報をもちいた精神状態の客観的検知に関する研究（元村祐貴）

当研究室では、感性、情動、共感、睡眠などをキーワードに研究に取り組んでいる。最近では、脳波や眼球電図、心電図などの客観的な生体情報から、その時の情動や睡眠中の夢見の有無などの主観的な体験を推定するアルゴリズムの開発を目指して研究を進めている。いつ、どのようなメカニズムでどのような精神機能が生じるのか、またそれらの精神機能はヒトの生存のためにどのような役割を果たしてきたのか、感性科学、生理人類学、脳神経科学などの側面からアプローチしている。人間社会の本質を担うヒトの感性・情動機能について明らし、well-being な社会の実現のためにその成果を還元することを目標にしている。



写真（生体情報測定実験の様子）

4. 部門活動報告

レジリエンスデザイン部門

講演会などの開催

○2018年3月6日(火) 14:00~17:30 九州大学 大橋キャンパス 511,512 教室

レジリエンスデザイン研究特別講演会「地区防災とレジリエンス」西澤雅道 福岡大学法学部准教授(内閣府より派遣)

○2018年7月28日(土) 13:00~17:00 九州大学 大橋キャンパス 多次元デザイン実験棟にて

2018年度第1回地区防災学会シンポジウム 九州北部豪雨から1年を振り返って～九州北部豪雨の教訓と地域防災力の在り方～

○2019年2/28(木) 15:00~18:00 九州大学 大橋キャンパスにて

レジリエンスデザイン研究会認知症予防とレジリエンスデザイン 100年どう生きるか 将来構想と実証実験・社会実装にむけて

「行動変容とレジリエンスデザイン: 福岡市実証実験において」 サムライト代表取締役 光岡 真里

「介護・福祉現場の課題と開発製品について」 JR 西日本新幹線テクノス 事業開発部長 毛利 順

「高齢者向け補助道具の評価方法について」 芸術工学府 姜 昱健

「認知加齢に対するスマート機器のデザインについて」 芸術工学府 鐘 煜嵐

「認知症予防と行動計測」 レジリエンスデザイン部門 藤智亮

「自動車運転と認知機能検査について」 レジリエンスデザイン部門 尾方 義人
を行った。

レジリエンスデザイン部門では、半期に一度程度、研究会やシンポジウムを行っている。シンポジウムは、できるだけ幅広く一般の方や非専門家・行政・地域・報道への情報提供を行うことを意識しており、研究会では企業の研究・開発部門や他大学の専門家とのやり取りをできるだけ密に行うことを目標とし開催している。研究会だ

けでなく共同研究や共同実験などにつながることを意識し、その成果も生まれてきている。

公開講座などの開催

福岡市南区と連携し、公開講座や出前授業を行っている。

○福岡市南区公開講座

講座名: 親子防災“自由研究”講座

8月10日(金)13時30分~15時 大橋キャンパス 多次元デザイン実験棟 小学校4~6年生の親子20組

内容: 災害はいつ来るかわかりません。避難所のこと、非常食のこと、避難ルートのことなど親子で一緒にいろいろな経験をしながら勉強していきましょう。この講座での勉強をいかして、夏休みの自由研究や普段の生活の工夫にひろげていってください。

○福岡市南区出前授業「防災について考えよう」

内容: 警固断層や九州北部豪雨などの自然現象の理解と、避難所・備蓄食・避難経路などの情報をお伝えし、防災について考えるきっかけとなる講義を行います。地区が希望されれば、3回や5回などの連続講義も対応します。地区から防災士がたくさん生まれるような具体的なお手伝いもします。防災初心者の方々を中心に、地域の特性やご希望に合わせて実施します。

南区塩原地区、高宮地区、清水地区、横手地区などで行った。

研究の紹介

2017年度~2020年度、基盤研究(A)、代表、「現代人の生理機能とゲノム解析から探る寒冷適応能と免疫機能の共進化」(綿貫茂喜)

代表者らは、日本人の寒冷曝露時の熱産生と遺伝要因との関連を検討し、脱共役タンパク質(UCP1)遺伝子多型が熱産生に関与すること、産熱型アレルの頻度が高緯度地域(寒冷地)で多いこと、UCP1 遺伝子が抗ウイルス作用を持つ遺伝子と連鎖することを示してきた。これらは人類が寒冷環境への適応を有利に進めるために、産熱機能を中心とした寒冷適応能と免疫機能が協働してきたこと

を示唆した。加えて、免疫系には非特異的な自然免疫と特異的な獲得(適応)免疫等があり、その進化はヒトの環境適応と深く関連してきたと推測される。そこで本研究は寒冷適応能と免疫機能との共進化が果たした役割を、現代人の体温調節等の生理反応と種々の免疫反応、及びゲノム解析から明らかにすることを目的とした。

低酸素状態と炎症反応は分子レベル、細胞レベル、そして臨床レベルで関連があることが知られており、組織傷害および組織修復に関与する免疫細胞と内皮細胞を共に活性化する。しかしながら、安静時の健常者における中程度の低圧低酸素曝露によってどのような免疫反応の変化が生じるのかについては十分に明らかでない。したがって今年度は低圧低酸素時の血液成分と免疫系指標に着目して曝露前後の変化を検討した。若年男性を 3500m 相当の低圧低酸素環境に 75 分間曝露した。結果として、曝露後半で最も SpO2 は低下し、心拍数は高くなった。血圧に有意な変化はなかった。血液中の成分について、ストレスホルモンやサイトカインを主な対象として解析中である。今後、DNA メチル化、RNA 発現との関連を含めてさらなる検討を進める。

・2015 年度～2018 年度、基盤研究(B)、代表、「子育て支援プロダクト創出のための科学的エビデンスの構築」(藤智亮)

(1) 揺動刺激と音刺激が児に及ぼす鎮静効果の検証
前年度までに、被験児を、月齢 3～4 ヶ月、5～6 ヶ月および 7～8 ヶ月の 3 区分に分け、各区分最低 6 名を目標に実験を行ってきた。本年度は前年度までに遂行できなかった月齢 5～6 ヶ月の被験児に対する実験を行い、すべての実験を完了した。

実験は、九州大学大学院芸術工学研究院内の実験室で、気温・湿度などを適切に設定管理して行った。実験条件は、被験児 1 名につき、揺動 3 条件(母親の抱っこ・機械的な単振動・揺れ無し)×音 2 条件(ブラウンノイズ・音無し)の計 6 条件とした。児が 1 時間以上覚醒しており、且つ授乳後 1 時間以内のときにぐずりだしたときに 4 分間刺激を与え、児の鎮静効果を記録した。具体的な測定項目は、児の表情・泣き声(ビデオ映像)および児と母親の心電図とした。これらのデータを分析することにより、各条件における児の鎮静効果・児と母親のストレス反応を明らかにしていく。

(2) 子育てをサポートするためのプロダクトに必要なデザイン要件のまとめ

前年度までに、児の輸送反応(母に抱かれて移動するときに鎮静する反応)をプロダクトに活かせる可能性を見出した。このことについて、母に抱かれて移動するときに児が感じる加速度データを得たところ、鉛直方向運動が支配的であることが知られ、このデータを基にした児の鎮静化に有効なプロダクトの設計・試作を行った。

2016 年度～2019 年度、基盤研究(C)(特設分野・紛争研究)、代表、「社会的紛争における暴力誘発装置としての集団：“集団心理”の実証的検討」(縄田健悟)

本研究の目的は、暴力を生み出す“集団心理”を実証的に解明することである。人間は暴力を嫌うことが多くの心理学の研究から示唆されているにも関わらず、現実の紛争場面は他者への暴力に溢れている。本来暴力を嫌っている人間が、ある場面で暴力を振るうようになるのは一体なぜなのだろうか。本研究が着目したのは暴力誘発装置としての集団の役割である。集団暴行、集団非行、暴動、いじめ、民族紛争とジェノサイドなど、多くの暴力行動は集団で行われる。

2015 年度～2017 年度、基盤研究(B)、代表、「地域救急医療の質の向上に資する科学的証拠の構築に関する研究」

(山田クリス孝介)

消防機関と医療機関の既存のシステムに関する調査により、各消防機関が消防庁へ報告する統計情報と、医療機関における処置や治療に関する情報とが救急医療関連データとして各機関のシステムに蓄積されていた。佐賀大学医学部附属病院高度救命救急センター内にオフラインの専用端末を設置し、データベースを構築した。このデータベースを利用してデータ分析を進めていく予定である。地域救急医療のプロセスに関与する主要なステークホルダーが分析結果を有効利用するためには、時系列と地図での可視化が有用な可能性が示唆された。そして、地域救急医療情報連携システムを構築する上での課題を明らかにした。

構成員研究業績一覧（2017 – 2018 年）

安河内朗

【論文】

Akiyama T, Katsumura T, Nakagome S, Lee SI, Joh K, Soejima H, Fujimoto K, Kimura R, Ishida H, Hanihara T, Yasukouchi A, Satta Y, Higuchi S, Oota H. An ancestral haplotype of the human PERIOD2 gene associates with reduced sensitivity to light-induced melatonin suppression. PLOS ONE 12(6): e0178373, 2017. (doi: 10.1371/journal.pone.0178373)

Yasukouchi A, Toda N, Noguchi H. Optimal Lighting Conditions for Office Workers from the Perspective of Non-visual Effects. KnE Life Sciences, 4(5), 451-461, 2018. (10.18502/kl.v4i5.2576)

【学会発表】

< 国際発表 >

Mukae H, Yasukouchi A. A study on human sense properties to improve operation accuracy for the human machine interface. The 1st APACPH Bangkok Region Conference and The 8th International Public Health Conference Thailand, May 2017

Yasukouchi A. Adaptability to the artificial light in modern society from the perspective of non-visual effects. Frontiers in Human Biology, Invited conference in Izmir, Turkey, September 2018

Yasukouchi A, Maeda T, Hara K, Furuune H. Effects of an artificial skylight in a daytime on non-visual functions in young adults. Russian-Japanese Scientific Symposium, Physiological anthropology and human ecology: Studies in modern and ancient populations, Moscow, December 2018.

前田享史

【論文】

Maeda T. Relationship between maximum oxygen uptake and peripheral vasoconstriction in a cold environment. Journal of Physiological Anthropology, 36: 42, 2017. (doi:10.1186/s40101-017-0158-2)

Abe D, Fukuoka Y, Maeda T, Horiuchi M. Energy cost and lower leg muscle activities during erect bipedal locomotion under hyperoxia. Journal of Physiological Anthropology 37: 18, 2018. (doi:10.1186/s40101-018-0177-7)

Vidyarini E, Maeda T. Effect of Transient Changes of Air Temperature on Subjective Response of Office Worker in Tropical Country (Case Study: Jakarta, Indonesia). KnE Life Sciences, 4(5), 435-444, 2018. (doi:10.18502/kl.v4i5.2574)

若林斉, 前田享史, 西村貴孝. 温熱と適応・生活習慣の変容による人類の温熱環境適応能の潜在化と顕在化. 日本生理人類学会誌, 23(4), 167-170, 2018

前田俊輔, 伊達豊, 西村貴孝, 新村美帆, 林政伸, 青柳潔, 澤田晋一, 前田享史. 暑熱環境下における漸増負荷運動時の深部体温と生理情報との関連・熱中症予防のための基礎的検討. 日本生理人類学会誌, 23(4), 155-163, 2018

【学会発表】

< 国際発表 >

Maeda T, Takayashiki R. Relative humidity and secretory immunoglobulin A. The 1st APACPH Bangkok Region Conference and The 8th International Public Health Conference, Thailand, May 2017

Maeda T. Effects of seasonal change in basal metabolic rate on the seasonal difference in cold-induced thermogenesis. 2017 Symposium of

the Society for the Study of Human Biology & International Association of Physiological Anthropology "Human Biology of Climate Change", United Kingdom, Sep 2017

Vidyarini E, Maeda T. Effect of transient changes of air temperature on subjective response of office worker in tropical country. Case study: Jakarta, Indonesia. International Conference of Occupational Health and Safety 2017 "Occupational Health and Safety Trends and Challenges in Developing Countries", Indonesia, Nov 2017

Maeda T, Takahashi R. Effects of indoor air temperature and local thermal stimuli on mental task performance. International Conference of Occupational Health and Safety 2017 "Occupational Health and Safety Trends and Challenges in Developing Countries", Indonesia, Nov 2017

Maeda T. Relationship between endothelium-dependent vasodilation and cold-induced vasodilation. The 17th International Conference on Environmental Ergonomics, Japan, Nov 2017

Ruan L, Hashiguchi N, Hayashi M, Koga H, Nonaka T, Maeda T. Effects of bathing on psychophysiological responses in the elderly and the young males. The 17th International Conference on Environmental Ergonomics, Japan, Nov 2017

Otsuka T, Itoyama M, Yano M, Maeda T. The effects of indoor carbon dioxide concentrations on arousal level and task performance. 15th Conference of the International Society of Indoor Air Quality & Climate, Indoor Air 2018, United States of America, Jul 2018

Matsumoto K, Kobori Y, Wakabayashi H, Matsushita M, Kameya T, Maeda T, Saito M. Study on multiple organs coordination for non-shivering thermogenesis and vasomotor control in mild cold environment in human. 7th International Conference on the Physiology and Pharmacology of Temperature Regulation, Croatia, Oct 2018

Yasukouchi A, Maeda T, Hara K, Furuune H. Effects of an artificial skylight in a daytime on non-visual functions in young adults. Russian-Japanese Scientific Symposium, Physiological anthropology and human ecology: Studies in modern and ancient populations, Moscow, December 2018.

< 国内発表 >

鶴岡祥太, Etika Vidyarini, 前田享史. 夏季を想定した室内外の温度変化が精神作業及び生理反応に及ぼす影響. 日本生理人類学会第 76 回大会, 2017 年 11 月

李萌, 神田拓摩, 前田享史. 寒冷環境における局所加温刺激が体温調節及び精神作業パフォーマンスに及ぼす影響. 日本生理人類学会第 76 回大会, 2017 年 11 月

岡坂拓哉, 前田享史. 寒冷血管拡張反応に低圧・低酸素が及ぼす影響. 平成 29 年度日本生理人類学会研究奨励発表会（九州地区）, 2018 年 2 月

阮麟然, 橋口暢子, 林政伸, 古賀弘子, 野中隆, 前田享史. 入浴が高齢者の血圧変動に及ぼす影響. 平成 29 年度日本生理人類学会研究奨励発表会（九州地区）, 2018 年 2 月

茂木賢太, 前田享史. 気温と湿度が唾液中分泌型免疫グロブリン A とコルチゾールに与える影響. 平成 29 年度日本生理人類学会研究奨励発表会（九州地区）, 2018 年 2 月

前田享史. 寒冷環境への適応. 応用生理人類学研究センターシンポジウム「現代人の環境適応能 ～生理人類学の視点から～」, 2018 年 3 月

胡少営, 前田享史. フィールド調査における夏季の温熱的主観申告の性別差・部位差・安定性. 日本生理人類学会第 77 回大会, 2018 年 6 月

Vidyarini E, Tsuruzono S, Maeda T. Effect of temperature step changes on physiological responses and mental task performance in Indonesian subjects. 日本生理人類学会第 77 回大会, 2018 年 6 月

若林斉, 前田享史, 西村貴孝. 温熱と適応—生活習慣の変容による人類の温悦環境適応能の潜在化と顕在化—. 日本生理人類学会第 77 回大会, 2018 年 6 月

前田享史. 低湿度環境、下肢温浴が免疫機能に及ぼす影響. 2018 年度第 1 回地区防災学会シンポジウム, 2018 年 7 月

矢野雅人, 前田享史. 常圧低酸素環境下における二酸化炭素付加が P300 に与える影響. 日本生理人類学会第 78 回大会, 2018 年 10 月

松本健太郎, 小堀祐資, 若林斉, 亀谷俊満, 松下真美, 前田享史, 斉藤昌之. 軽度寒冷曝露時の非震え代謝における全身的協同の検討. 日本生理人類学会第 78 回大会, 2018 年 10 月

胡少営, 前田享史. 気温と着衣量が作業パフォーマンス及び生理反応に及ぼす影響. 日本生理人類学会第 78 回大会, 2018 年 10 月

Vidyarini E, Tsuruzono S, Maeda T. Comparison of Physiological Responses and Mental Task Performance between Indonesian and Japanese in Air Temperature Step Changes. 日本生理人類学会第 78 回大会, 東京大学, 2018 年 10 月

江原佑, 松本健太郎, 小堀裕資, 若林斉, 前田享史, 松下真美, 斉藤昌之. 主観的寒冷耐性とヒトの体温調節応答の関係. 空気調和・衛生工学会北海道支部第 53 回学術講演会, 2019 年 3 月

【その他】
<受賞>
2nd Poster Presentation Prize (Experimental Physiology & The Physiological Society prize), Ruan L, Hashiguchi N, Hayashi M, Koga H, Nonaka T, Maeda T. Effects of bathing on psychophysiological responses in the elderly and the young males. The 17th International Conference on Environmental Ergonomics, Japan, Nov 2017

優秀発表賞, 茂木賢太, 前田享史. 気温と湿度が唾液中分泌型免疫グロブリン A とコルチゾールに与える影響. 平成 29 年度日本生理人類学会研究奨励発表会 (九州地区), 2018 年 2 月

日本生理人類学会第 77 回大会優秀発表賞, Vidyarini E, Tsuruzono S, Maeda T. Effect of temperature step changes on physiological responses and mental task performance in Indonesian subjects. 2018 年 10 月

<メディア掲載>
読売新聞, オフィスにおける気温について取材, 2017 年 5 月

伊藤浩史

【論文】
Murayama Y, Kori H, Oshima C, Kondo T, Iwasaki H, Ito H
Low temperature nullifies the circadian clock in cyanobacteria through Hopf bifurcation
Proceedings of National Academy of Sciences 114, 5641–5646 (2017)

Sugi T, Ito H, Nishimura M, Nagai KH
C. elegans collectively forms dynamical networks
Nature Communications 10, 683 (2019)

【学会発表】
<国内発表>
伊藤浩史, 概日リズムと温度に関する理論的研究または落ちこぼれの時間生物学, 時間生物学会 2018 年 10 月

Hiroshi Ito, Chronobiology based on amplitude, 時間生物学会, 2018 年 10 月

伊藤浩史, 杉拓磨, 永井健. 生物リズム・パターンの制御. 自律分散シンポジウム, 2019 年 01 月

【その他】
<受賞>
日本時間生物学会ポスター賞. 山崎春樹, 伊藤浩史. 低温下のシロイヌナズナの概日リズムの共鳴 2017 年 10 月

日本時間生物学会奨励賞. 伊藤浩史. 2018 年 10 月

日本時間生物学会ポスター賞. 関元秀 伊藤浩史. 概日時計がもつ自律振動性の進化に関する理論研究 2018 年 10 月

瀬口典子

【論文】
Seguchi N, Quintyn CB, Yonemoto S, Takamuku H. 2017. An assessment of postcranial indices, ratios, and body mass versus eco-geographical variables of prehistoric Jomon, Yayoi agriculturalists, and Kumejima Islanders of Japan. American Journal of Human Biology. 00:e23015. <https://doi.org/10.1002/ajhb.23015>. 2017. May

Padgett, BD and Seguchi N. 2018. Gender disparity in nasal fractures during the Yayoi period of Japan. American Journal of Physical Anthropology 165 (s66):197. 2018, April.

Tomita, H and Seguchi N. 2019. Health inequality as seen in human skeletal remains in early modern period Japan. American Journal of Physical Anthropology 168 (S68): 247. 2019. March.

【その他】
瀬口 典子, 2017. 米トランプ政権の反科学主義に懸念、50カ国超で「科学のためのマーチ」, 週刊金曜日 (113号), P.36., 2017. 5月19日

瀬口典子、太田好信 2019. シンポジウム『アイヌ遺骨・副葬品のゆくえ—返還をめぐる科学・文化復興・尊厳の言説』Crossover, Vol.44. Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University. March 2019. PP.30-31.

【学会発表】
<国際発表>
Padgett, BD. and Seguchi N. 2018. Gender disparity in nasal fractures during the Yayoi period of Japan. The 87th annual meeting of the American Association of Physical Anthropologists, Austin, Texas, USA. 2018.04

Seguchi N and Tomita H. 2018. Access to human skeletal remains collections and research opportunities in Japan. Global History of Health Project: Health, Disease, and Lifestyle. at Jilin University Changchun, China. 2018. May 17-18. (招聘講演)

Seguchi N. 2018. The repatriation of Ainu skeletal remains and ethical considerations: Can Japanese physical anthropologists work with descendant communities? Department of Sociology and Anthropology, Montana State University, Bozeman, Sept. 12, 2018.(招聘講演)

Seguchi N. 2018. Gender, Sex, and Sexuality in Human Evolution. Department of Sociology and Anthropology, The Montana State University, Bozeman, MT USA. Sept. 13, 2018.(招聘講演)

Seguchi N. 2018. The controversies surrounding Ainu skeletal remains- Overview. Open Forum at Law School at University of Hawaii, Manoa. Sept. 26. 2018.(招聘講演)

Seguchi N. 2018. The controversies surrounding Ainu skeletal remains, indigenous rights, and research ethics. Center for Japanese Studies (co-sponsored by Center for Japanese studies and Department of Anthropology. University of Hawaii, Manoa, Sept. 27. 2018. (招聘講演)

Tomita, H and Seguchi N. 2019. Health inequality as seen in human skeletal remains in early modern period Japan. The 87th annual meeting of American Journal of Physical Anthropology. Cleveland, Ohio, USA. March 27-30, 2019.

< 国内発表 >

瀬口典子. 2017. 「人種」優劣と植民地主義に繋がった自然人類学, 「人種神話を解体するー科学と社会の知」出版出版記念 連続セミナー@東京第2回 ヒトの多様性に関する最新の成果から. 2017年11月24日

瀬口典子. 2018. 「アイヌ地域社会とともに歩むために. 九州大学比較社会文化研究院シンポジウム「アイヌ遺骨・副葬品のゆくえ: 返還をめぐる科学・文化復興・尊厳の言説」 JR 博多シティ, 福岡, Feb 11, 2018. シンポジウムの立案、運営と実施. シンポジウムにおけるコメント

Seguchi N. 2018. Introduction of Professor Jonathan Marks. At the summer seminar at Integrated Research into the Processes and Mechanisms of Racialization (Grant-in-Aid for Scientific Research S: PI Yasuko Takezawa, Institute of Humanities, Kyoto University) July, 2018. 科研 (S) 「人種化のプロセスとメカニズムに関する複合的研究」2016.06～2021.03, 代表者: 竹沢泰子, 京都大学人文科学研究所.

瀬口典子 2018. 第72回日本人類学会大会一般シンポジウム: 「人骨研究の在り方: アイヌ遺骨研究が投げかける問題と人類学の未来を考える」シンポジウム発案者・オーガナイザー (瀬口典子&五十嵐由里子): 発表者1) 瀬口典子: 「先住民遺骨が投げかける問題と人類学の未来: アメリカの事例と日本」2018年10月20日、三島、静岡

【その他】

< メディア掲載 >

Noriko Seguchi and Conrad B Quintyn, 2018. How Evolutionary Forces, Development Constraints and A Changing Climate Influenced Genetic Drift, Science Trends, 2018.01, <https://sciencetrends.com/evolutionary-forces-development-constraints-changing-climate-influenced-genetic-drift/>

Conrad Quintyn and Noriko Seguchi, 2018. An assessment of postcranial indices, ratios, and body mass versus eco-geographical variables of prehistoric Jomon, Yayoi agriculturalists, and Kumejima Islanders of Japan. Supplement for Biomedical Advances (ISSN 2573-0355), the Editors' Picks, Biomedical Advances, Editors' Picks ISSN 2573-0355, 2018.04 <http://biomedical-advances.org/ep-20182-22/>

村木里志

【論文】

Nasir N, Hayashi K, Loh PY, Muraki S. The effect of assistive force on the agonist and antagonist muscles in elbow flexion. Movement, Health & Exercise 6:2, 35-52, 2017.

Purwaningrum L, Loh PY, Muraki S. The effectiveness of an elementary school chair design to ensure ease of mobility, International Journal of Technology, 8:2, 2017. (doi:10.14716/ijtech.v8i2.6142)

宇野直士, Loh PY, 村木里志. 一過性の視覚制限シミュレーションが歩行動作に与える影響, アダブテッド体育・スポーツ学研究, 4:1, 2-11, 2018.

宇野直士, Loh PY, 村木里志. 網膜色素変性症患者の障害物またぎ動作における下肢運動の特徴, 人間工学, 54:5, 197-204, 2018.

中島弘貴, Loh PY, 高崎颯, 福元清剛, 福田修, 村木里志. 若年男性における大腿部の筋量と歩行中の下肢関節運動との関係性, 日本生理人類学会誌, 23:1, 1-7, 2018. (doi: 10.20718/jjpa.23.1_1)

福元清剛, 石内愛美, 中島弘貴, 能登裕子, 佐土原道人, 福田修, 村木里志. 日本人男女の下肢筋横断面積の加齢変化, 日本生理人類学会誌 23:3, 87-95, 2018. (doi: 10.20718/jjpa.23.3_87)

村木里志. エイジングと適応, 日本生理人類学会誌 23:4, 9-18, 2018. (doi: 10.20718/jjpa.23.4_181)

武末慎, Loh PY, 村木里志, 濱中伸介, 山田敦志, 池上功一, 和田健希, 古達浩史. 靴着用時における歩行中の足甲接触圧の経時変化, 人間工学, 54:3, 108-114, 2018.

Loh PY, Yeoh WL, Nakashima H, Muraki S., Deformation of the median nerve at different finger postures and wrist angles. PeerJ, 2018. (doi:10.7717/peerj.5406)

中島弘貴, 武末慎, Loh PY, 村木里志. 日本人女性における歩行中の下肢関節運動の加齢変化, 日本生理人類学会誌, 24:1, 9-18, 2019. (doi:10.20718/jjpa.24.1_9)

【Proceedings】(査読あり)

Choi J, Loh PY, Muraki S., A simulation study for the effects of assistive time considering linear force release in elbow flexion, Proceedings of the 20th Congress of the International Ergonomics Association (IEA 2018). Advances in Intelligent Systems and Computing, vol 820. Springer, Cham, 347-350, 2018. (doi:10.1007/978-3-319-96083-8_46)

Muraki S. Human-Centered Design for Advanced Technology, Advances in Social Science, Education and Humanities Research 207, 2018. (doi: 10.2991/reka-18.2018.4)

Muraki S, Hayashi K, Nasir N, Loh PY. Motor control with assistive force during isometric elbow flexion. Proceedings of the 20th Congress of the International Ergonomics Association (IEA 2018). Advances in Intelligent Systems and Computing, vol 820. Springer, Cham, 191-194, 2018. (doi:10.1007/978-3-319-96083-8_24)

Saito S, Muraki S. Characteristics of surface EMG during gait with and without power assistance. Proceedings of the 20th Congress of the International Ergonomics Association (IEA 2018). Advances in Intelligent Systems and Computing, vol 819. Springer, Cham, 739-743, 2018. (doi: 10.1007/978-3-319-96089-0_80)

Takesue S, Loh PY, Muraki S, Hamanaka S, Yamada A, Ikegami K. Individual differences in contact pressure on the dorsal surface of the foot during gait, Proceedings of the 20th Congress of the International Ergonomics Association (IEA 2018). Advances in Intelligent Systems and Computing, vol 824. Springer, Cham, 216-219, 2018. (doi:10.1007/978-3-319-96071-5_22)

Uno T, Loh PY, Muraki S. Influence of information acquisition strategies on foot proprioceptive and obstacles avoidance pattern among low-vision people, Proceedings of the 20th Congress of the International Ergonomics Association (IEA 2018). Advances in Intelligent Systems and Computing, vol 819. Springer, Cham, 786-790, 2018. (doi:10.1007/978-3-319-96089-0_86)

【学会発表】

< 国際発表 >

Muraki S, Nakashima H, Loh PY, Fukumoto K, Fukuda O, Usefulness of leg muscle mass measurement for active life in advanced age. The 8th International Public Health Conference, Thailand, May 2017

Nasir N, Hayashi K, Loh PY, Muraki S. Comparison of muscle adaptation toward assistive force between the young and elderly, The 2nd Asian Conference on Ergonomics and Design (ACED 2017), Japan, June 2017

Srisuro S, Son S, Muraki S. A comparative study of product packaging comfortability between elderly male and female users, The 2nd Asian Conference on Ergonomics and Design (ACED 2017), Japan, June 2017

Yeoh WL, Loh PY, Muraki S. Smart Walkers from an Ergonomics Perspective: A Review, The 2nd Asian Conference on Ergonomics and Design (ACED 2017), Japan, June 2017

Muraki S. Hayashi K, Nasir N, Loh PY, Muscle activity to assistive force during isometric elbow flexion, 13th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA 2017), UK, September 2017

Nakashima H, Loh PY, Afiah, IN, Takasaki H, Takesue S, Muraki S. Age-associated lower extremity kinematics during gait motion in Japanese women, 13th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA 2017), UK, September 2017

Uno T, Loh PY, Muraki S. Lower limb kinematic characteristics during obstacle step-over in individuals with visual impairment, 13th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA 2017), UK, September 2017

Muraki S. New Role of ERGONOMICS in Super-aging Society, Conference on Industrial Technology for Sustainable Development (Icon-ITSD), Makassar, Indonesia, October 2017

Muraki S. Preferable home environment for the independent elderly to prevent falls and maintain activities of daily living. From Room to Region: Age-Friendly Environmental Design and Planning in the Western Asia-Pacific, Fukuoka, Japan, March 2018

Choi J, Loh PY, Muraki S. A simulation study for the effects of assistive time considering linear force release in elbow flexion, 20th Congress International Ergonomics Association, Italy, August 2018

Muraki S, Hayashi K, Nasir N, Loh PY, Motor control with assistive force during isometric elbow flexion, 20th Congress International Ergonomics Association, Italy, August 2018

Saito S, Muraki S. Characteristics of surface EMG during gait with and without power assistance, 20th Congress International Ergonomics Association, Italy, August 2018

Takesue S, Loh PY, Muraki S, Hamanaka S, Yamada A, Ikegami K. Individual differences in contact pressure on the dorsal surface of the foot during gait, 20th Congress International Ergonomics Association, Italy, August 2018

Uno T, Loh PY, Muraki S. Influence of information acquisition strategies on foot proprioceptive and obstacles avoidance pattern among low-vision people, 20th Congress International Ergonomics Association, Italy, August 2018

Muraki S. Human-centered design for advanced technology: The 3rd International Conference on Creative Media, Design and Technology (REKA2018), Surakarta, Indonesia, September 2018

Revilla JA, Loh PY, Muraki S. Exploratory study on the impacts of vibration exposure on hand functionality and forearm muscle activities, 5th SEANES International Conference on Human Factors and Ergonomics in South-East Asia, Thailand, December 2018

< 国内発表 >

宇野直士, Loh PY, 村木里志. 視覚障害者の障害物またぎ動作における足部軌跡の特徴, 第 26 回視覚リハビリテーション学会, 2017 年 6 月

宇野直士, Loh PY, 村木里志. 網膜色素変性症による視覚障害が障害物またぎ動作時の下肢運動に与える影響, 日本人間工学会第 58 回大会, 2017 年 6 月

武末慎, Loh PY, 村木里志, 濱中伸介, 山田敦志, 池上功一, 和田健希, 古達浩史, 靴着用時における歩行中の足甲接触圧の経時変化, 日本人間工学会第 58 回大会, 2017 年 6 月

阮至廷, Loh PY, 村木里志, 電動台車による操作者の歩行特性に関する基礎的研究, 日本人間工学会第 58 回大会, 2017 年 6 月

田中颯, 中島弘貴, 村木里志, 足踏み動作と歩行動作における関係性の検討, 日本人間工学会第 58 回大会, 2017 年 6 月

吉武良治, 赤松幹之, 石橋基範, 笠松慶子, 下村義弘, 村木里志, 山田クリス孝介, 横井元治, 榎原毅日本人間工学会 (JES) に対する意識調査. 日本人間工学会第 58 回大会, 2017 年 6 月

吉武良治, 赤松幹之, 石橋基範, 笠松慶子, 下村義弘, 村木里志, 山田クリス孝介, 横井元治, 榎原毅学会員の属性の動向分析. 日本人間工学会第 58 回大会, 2017 年 6 月

吉武良治, 赤松幹之, 石橋基範, 笠松慶子, 下村義弘, 村木里志, 山田クリス孝介, 横井元治, 榎原毅若手人材にとって学術大会をより魅力ある形にするために何ができるか? . 日本人間工学会第 58 回大会, 2017 年 6 月

榎原毅, 赤松幹之, 石橋基範, 笠松慶子, 下村義弘, 村木里志, 山田クリス孝介, 横井元治, 吉武良治多様化する学術ニーズに応える学会改革アクションプランの概要. 日本人間工学会第 58 回大会, 2017 年 6 月

福尾実人, 村木里志. 地域在住要支援・軽度用介護男性高齢者のフレイル要因と身体各部位筋量との関連. 日本サルコペニア・フレイル学会誌, 2017 年 10 月

宇野直士, Loh PY, 村木里志. 網膜色素変性症による視覚障害が歩行動作に与える影響, 第 41 回日本障がい者体育・スポーツ研究発表会 - 障がいのある方の体育・スポーツ研究会 -, 2017 年 11 月

岡部直斗, 植田遥平, 武末慎, 高崎颯, 村木里志. 靴のトゥスプリングが高齢者の歩行動作へ及ぼす影響. 人類労働学会西日本地方会第 42 回大会, 2017 年 12 月

阮至廷, Loh PY, 村木里志. 電動台車利用時の動作特性ー平地歩行およびマニュアル台車利用時との比較ー. 人類労働学会西日本地方会第 42 回大会, 2017 年 12 月

Kong MS, 妻木翔太, 高崎颯, 松隈浩之, Loh PY, 村木里志. 上肢動作の違いが足踏み動作に及ぼす影響. 人類労働学会西日本地方会第 42 回大会, 2017 年 12 月

妻木翔太, Kong MS, 高崎颯, 松隈浩之, Loh PY, 村木里志. シリアスゲーム開発を目的とした異なるリズムにおける足踏み運動の検討. 日本人間工学会九州・沖縄支部会第 38 回大会, 2017 年 12 月

村木里志, 中島弘貴, 福元清剛, 松隈浩之, 福田修. 高齢者の下肢筋量を増やすための取り組み. 第 91 回日本産業衛生学会, 2018 年 5 月

王媛媛, 崔至源, Loh PY, 村木里志, 等尺性肘関節屈曲運動のアシスト時における筋活動の特徴. 日本人間工学会第 59 回大会, 2018 年 6 月

小川タケル, Loh PY, 村木里志, 猪口耕成, 野口康成, 江島賢一. 床材の違いが高齢者の歩行動作に与える影響, 日本人間工学会第 59 回大会, 2018 年 6 月

村木里志, Loh PY, 福田修, 斎藤誠二, 能登裕子, 山本元司, 身体動作能力を拡張するテクノロジーに対する人間の適応能の理解, 日本人間工学会第 59 回大会, 2018 年 6 月

村木里志, PingYeapLoh, 福田修, 斎藤誠二, 能登裕子, 山本元司. 身体動作能力を拡張するテクノロジーに対する人間の適応能の理解とその応用. 日本人間工学会第 59 回大会, 2018 年 6 月

福田修, 村上真基, 山口暢彦, 奥村浩, 村木里志. 人間の適応能評価を目的としたインピーダンス可変機構の開発. 日本人間工学会第 59 回大会, 2018 年 6 月

保坂享俊, 阿部紘一, 斎藤誠二, 村木里志. 歩行アシストに対する筋電応答. 日本人間工学会第 59 回大会, 2018 年 6 月

Choi J, Loh PY, 村木里志. 動作アシストを想定した利用者の force release のシミュレーション. 日本人間工学会第 59 回大会, 2018 年 6 月

Yeoh WL, Loh PY, Muraki S. An exploratory study into the effects of forces from a walking assist device with motorized wheels on basic gait characteristics, 日本人間工学会第 59 回大会, 2018 年 6 月

村木里志. エイジングと適応. 日本生理人類学会第 77 回大会, 2018 年 6 月

松隈浩之, 村木里志, 妹尾武治. 足踏み運動ゲーム【リハビリウムアシブミジョーズ】. コンピュータエンターテインメントデベロッパーズカンファレンス 2018 (CEDEC2018), 2018 年 8 月

宇野直士, Loh PY, 村木里志. 異なる情報探索方略がロービジョン者の足部位置感覚および障害物回避動作に与える影響, 第 27 回視覚リハビリテーション学会, 2018 年 9 月

福尾実人, 村木里志. 地域在住男性高齢者のフレイル要因と身体各部位筋量との関連. 第 5 回日本予防理学療法学会学術大会, 2018 年 10 月

王媛媛, 崔至源, Loh PY, 村木里志. 両側等尺性肘関節屈曲運動におけるアシスト時の筋活動の特徴. 日本人間工学会九州・沖縄支部会第 39 回大会, 2018 年 11 月

妻木翔太, Kong MS, 松隈浩之, 村木里志. シリアスゲーム開発を目的とした足踏み運動の研究. 日本人間工学会九州・沖縄支部会第 39 回大会, 2018 年 11 月

Kong MS, 妻木翔太, Choi J, Yeoh WL, Loh PY, 村木里志. 足踏み動作の時間因子を用いた移動能力評価における年齢別標準値の作成. 第 43 回人類労働学会西日本地方会, 2018 年 12 月

村木里志. 人間工学・生理人類学の現在・過去・未来. 九州大学芸術工学部(旧九州芸術工科大学) 人間工学教室 50 周年記念イベント記念シンポジウム, 2019 年 3 月

大草孝介

【著書】
大草孝介. カオスモデリング(pp.173-175). 統計科学百科事典(日本統計学会編),丸善出版株式会社, 2018.12

大草孝介・山本康平・露崎博之.Python による機械学習: 予測解析の必須テクニック, 共立出版株式会社, 2019.2

【論文】
永沼暁, 大草孝介. 複数業務を行う窓口のサービス時間に着目した平均待ち時間の改善に関する研究. 計算機統計学, 30:1, 43-50, 2018.

永沼暁, 大草孝介. マイクロ波ドップラーセンサを用いたモデルベースの転倒状態推定に関する研究. 計算機統計学, 30:1, 17-30, 2018.

Okusa K, Kamakura T. A simulation study for performance validate of indoor location estimation based on the radial weibull/extreme-value weibull distribution, International Journal of Applied Mathematics, 48:2, 111-117, 2018.

Okazaki T, Okusa K, Yoshida K. Prediction of the number of defects in image sensors by VM using equipment QC data, IEEE Transactions on Semiconductor Manufacturing, 32:4, 434-437, 2019.

Okusa K, Kamakura T. Estimates for the spatial locations of the indoor objects by using radial extreme value weibull distribution, IAENG Transactions on Engineering Sciences, pp.59-70, 2019.

【Proceedings】(査読あり)
Okusa K, Kamakura T. Statistical Indoor Location Estimation for the NLoS Environment Using Radial Extreme Value Weibull Distribution. Proceedings of the 2017 International Conference of Computational Statistics and Data Engineering, 555-560, 2017

【学会発表】
< 国際発表 >
Okusa K, Kamakura T. Statistical Indoor Location Estimation for the NLoS Environment Using Radial Extreme Value Weibull Distribution. 2017 International Conference of Computational Statistics and Data Engineering, UK, July 2017

Okazaki T, Okusa K, Yoshida, K. Prediction of the number of defects in image sensors by VM using equipment QC data, IEEE International Symposium on Semiconductor Manufacturing (ISSM), Japan, December 2018

【その他】
< 受賞 >
Best Paper Award of the 2017 International Conference of Computational Statistics and Data Engineering, Okusa K, Kamakura T. Statistical Indoor Location Estimation for the NLoS Environment Using Radial Extreme Value Weibull Distribution, Proceedings of ICCSDE 2017, pp555-560, 2017.

Best of the Best Paper Award of International Symposium on Semiconductor Manufacturing (ISSM) 2018, Okazaki, T., Okusa, K. & Yoshida, A. Prediction of the Number of Defects in Image Sensors by VM using Equipment QC Data, Proceedings of ISSM 2018, 2018

九州半導体・エレクトロニクスイノベーション協議会 (SIIQ) 第 1 回 SIIQ 技術大賞, 大草孝介, 半導体製造における撮像欠陥数の推定に関する統計的研究, 2019.

Loh Ping Yeap

【論文】
Loh PY, Yeoh WL, Nakashima H, Muraki S. Impact of keyboard typing on the morphological changes of the median nerve. Journal of Occupational Health, 59:5, 408-417, 2017. (doi:10.1539/joh.17-0058-OA)

Loh PY, Yeoh WL, Nakashima H, Muraki S., Deformation of the median nerve at different finger postures and wrist angles. PeerJ, 2018. (doi:10.7717/peerj.5406)

【Proceedings】(査読あり)
Loh PY, Yeoh WL, Muraki S. Impacts of typing on different keyboard slopes on the deformation ratio of the median nerve. Proceedings of the 20th Congress of the International Ergonomics Association (IEA 2018). Advances in Intelligent Systems and Computing, vol 820. Springer, Cham, 250-254, 2018. (doi:10.1007/978-3-319-96083-8_33)

【学会発表】
< 国際発表 >
Loh PY, Yeoh WL, Muraki S. The effect of keyboard typing on the median nerve at the proximal carpal tunnel, The 2nd Asian Conference on Ergonomics and Design (ACED 2017), Japan, June 2017

Loh PY, Nakashima H, Yeoh WL, Muraki S. Effect of keyboard typing on the median nerve shape, 13th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA 2017), UK, September 2017

Loh PY, Median nerve shape associated with typing and wrist posture, Marconi Conference, USA, May 2018 (Invited speaker)

Loh PY, Muraki S. Work-related carpal tunnel syndrome among computer users: Perspectives from ergonomics, Person-Environment-Occupation model, and biomechanical frame of reference, 1st International Congress of Clinical Occupational Therapy, Japan, July 2018

Loh PY, Yeoh WL, Muraki S. Impacts of typing on different keyboard slopes on the deformation ratio of the median nerve, 20th Congress International Ergonomics Association, Italy, August 2018

Loh PY, Takesue S, Yeoh WL, Muraki S. A short review on the anatomy and biomechanics for grasp and pinch, 5th SEANES International Conference on Human Factors and Ergonomics in South-East Asia, Thailand, December 2018

< 国内発表 >
Loh PY, 村木里志. Prevention of carpal tunnel syndrome: A perspective from the median nerve behavior by ultrasound imaging. 日本人間工学会九州・沖縄支部会第 38 回大会, 2017 年 12 月

【その他】
< 受賞 >
5th SEANES International Conference on Human Factors and Ergonomics in South-East Asia, Best Presentation Award, Loh PY, Takesue S, Yeoh WL, Muraki S. A short review on the anatomy and biomechanics for grasp and pinch. December 2018

Journal of Physiological Anthropology, Best Reviewer Award 2017. April 2018

能登裕子

【論文】
山中真, 梶原弘平, 能登裕子. 転倒時における予防動作から見た転倒防御姿勢分類, インターナショナル Nursing Care Research, 16:1, 1-8, 2017

平川善大, 大池美也子, 能登裕子. 看護基礎教育におけるウェブディスカッションの有効性, 日本看護教育学会誌, 27:2, 1-14, 2017

Kajiwaru K, Mantani A, Noto H, Miyashita M. The relationship between caregiver burden and caregiver pulse rate measured using a wristwatch-type pulsimeter with accelerometer in home-based family caregivers for persons with dementia: Pilot study, Psychogeriatrics, 2018. (doi: 10.1111/psyg.12364)

Kajiwar K, Noto H, Yamanaka M. Changes in caregiving appraisal among family caregivers of persons with dementia: A longitudinal study over 12 months. Psychogeriatrics, the official journal of the Japanese Psychogeriatric Society, 18:6, 460-467, 2018

Kajiwar K, Noto H, Yamanaka M. Positive Appraisal Reduces Caregiver Burden Among In-Home Family Caregivers of Persons with Dementia in Japan. Japanese Journal of International Nursing Care Research, 17:2, 61-67, 2018

能登裕子, 村木里志.車いすティッピングレバーの形状と位置が介助者の踏み込み操作に及ぼす影響. 日本看護技術学会誌, 18, 97-107, 2019. (doi: 10.18892/jsnas.18.0_97)

Kajiwar K, Kako J, Noto H, Oosono Y, Kobayashi, M. Response to “Factors associated with long-term impact on informal caregivers during Alzheimer's disease dementia progression: 36-month results from GERAS”, International Psychogeriatrics, 2019. (doi: 10.1017/S1041610219001042)

【学会発表】

< 国際発表 >

Noto H, Kajiwar K, Muraki S. The relations among physical sensations, body functions, and fall history elderly living at home, The 2nd Asian Conference on Ergonomics and Design (ACED 2017), Japan, June 2017

Noto H, Ogata Y, Nawata K, Watanuki S, Fuji T, Okusa K. Direction of service toward improving resilience capability at the time of disaster, International Nursing Research Conference 2017, Bangkok, Thailand, October 2017

< 国内発表 >

山下智美, 橋口暢子, 能登裕子, 大池美也子. 看護専門学校の看護教員における臨床経験の意味, 第 37 回日本看護科学学会学術集会, 2017 年 12 月

能登裕子, 村木里志. 車いすのティッピングレバーの改善と形状が踏み込み足底圧と負担感に及ぼす影響, 日本人間工学会第 59 回大会, 2018 年 6 月

能登裕子, 高木雄作, 介護施設職員の離職要因－職務満足度尺度調査を用いた検討－, 日本人間工学会九州・沖縄支部会第 39 回大会, 2018 年 11 月

樋口重和

【著書】

樋口重和. 時間学の構築Ⅲ ヒトと概日時計と時間. 第 2 章 ヒト概日時計の評価方法 (山口大学時間学研究所), 恒星社厚生閣, 2019

【論文】

Akiyama T, Katsumura T, Nakagome S, Sang Il Lee, Joh K, Soejima H, Fujimoto K, Kimura R, Ishida H, Hanihara T, Yasukouchi, A, Satta Y, Higuchi S, Oota H, An ancestral haplotype of the human PERIOD2 gene associates with reduced sensitivity to light-induced melatonin suppression, PLoS One, 12(6), 2017

Okada M, Kitamura S, Iwadare Y, Tachimori H, Kamei Y, Higuchi S, Mishima M. Reliability and validity of a brief sleep questionnaire for children in Japan, Journal of Physiological Anthropology, 36(1), 2017

Fukuda Y, Kai A, Tsujimura S, Higuchi S, Morita T, Human Melatonin Suppression in Response to Silent Substitution Stimuli of Photoreceptors. Journal of Science and Technology in Lighting, 41, 211-216.

Yasuo S, Iwamoto A, Sang Il Lee, Ochiai Y, Hitachi R, Shibata S, Uotsu N, Tarumizu C, Matsuoka S, Furuse M, Higuchi S, L-serine enhances light-induced circadian phase resetting in mice and humans, Journal of Nutrition, 147(12) 2347-2355, 2017.

落合将太郎, 原田和樹, 李相逸, 樋口重和, 夜の青色光と赤色光の生理作用: 測定項目間の違いと印象評価との関連性, 日本生理人類学会誌, 22(2), 69-76, 2017

林小百合, 和田宏子, 樋口重和, キムヨンキョ, 乳幼児の母親における危険画像認知時の脳活動: ERP を用いた検討, 日本生理人類学会誌, 22(3), 145-151, 2017

Hayashi S, Wada H, Sung Phil Kim, Motomura Y, Higuchi S, Yeon Kyu Kim, Enhanced Nogo-P3 amplitudes of mothers compared with non-mother women during an emotional Go/Nogo task, Journal of Physiological Anthropology, 37(1):8, 2017.

Okada M, Otaga M, Tsutsui T, Tachimori H, Kitamura S, Higuchi S, Mishima K, Association of sleep with emotional and behavioral problems among abused children and adolescents admitted to residential care facilities in Japan, PLoS ONE, 2018.

Nishimura Y, Ikeda Y, Suematsu A and Higuchi S, Effect of visual orientation on mu suppression in children: a comparative EEG study with adults, Journal of Physiological Anthropology, 37(16), 2018.

江藤太亮, 松森孝平, 李相逸, 樋口重和, 瞳孔の対光反射のスペクトル感度に関する研究: 児童と若年成人の比較, 日本生理人類学会誌, 23(2), 63-67, 2018

Nishimura Y, Ikeda Y, Higuchi S, The relationship between inhibition of automatic imitation and personal cognitive styles, Journal of Physiological Anthropology, 37(24), 2018.

Sang-il Lee, Matsumori K, Nishimura K, Nishimura Y, Ikeda Y, Eto T, Higuchi S, Melatonin suppression and sleepiness in children exposed to blue-enriched white LED lighting at night, Physiological Reports, 2018.

Ikeda Y, Nishimura Y, Higuchi S, Effects of the differences in mental states on the mirror system activities when observing hand actions, Journal of Physiological Anthropology, 2019.

【学会発表】

< 国際発表 >

Ikeda Y, Nishimura Y, Higuchi S, Effect of EEG mu rhythm neurofeedback training on mirror neuron system activity, 2017 SSHB - IAPA Joint Symposium, UK, Sep 2017

Sang-il Lee, Takeoka K, Tarumizu C, Matsuoka S, Yasuo S, Higuchi S, Promoting effect of L-Serine intake on circadian photoentrainment in humans, 2017 SSHB - IAPA Joint Symposium, UK, Sep 2017

Hayashi S, Sung-Phil KIM, Yeon-kyu KIM, Higuchi S, Effect of emotion regulation training with real-time neurofeedback of frontal gamma activity on the emotional Go/Nogo task performance: a pilot study, 2017 SSHB - IAPA Joint Symposium, UK, Sep 2017

Nishimura Y, Ikeda Y, Higuchi S, Effect of Imitation-inhibition training on human mirror system activity, 2017 SSHB - IAPA Joint Symposium, UK, Sep 2017

Higuchi S, Nishimura K, Lee S, Kitamura S, Entrainment of Circadian Rhythm to Natural Light-Dark Cycle in Children, 2017 SSHB - IAPA Joint Symposium, UK, Sep 2017

Higuchi S, Sang-il Lee, Experimental approaches how to prevent light-induced melatonin suppression and circadian rhythm disturbance in shift workers, The 1st International Conference of Occupational Health and Safety, Indonesia, Nov 2017 (Invited Lecture)

Eto T, Matsumori K, Sang-il Lee, Higuchi S, Comparison of spectral sensitivities of pupil light reflex in children and young adults, Asian Forum on Chronobiology in 2018, Japan, Sep 2018

Higuchi S, Tsuyama T, Noguchi A, Lee SI, Maeda K, Awata Y, Does light with Variation in spectrum and intensity during night shift prevent delay of circadian rhythm and sleepiness?, 24th Congress of the European Sleep Research Society, Switzerland, Sep 2018

Lee SI, Kinoshita S, Noguchi A, Eto T, Maeda K, Higuchi S, D Effects of short exposure to different light illuminance in regular rest breaks on melatonin suppression and sleepiness during simulated night work, 24th Congress of the European Sleep Research Society, Switzerland, Sep 2018

Nishimura N, Ikeda Y, Higuchi S, Relationship between psychophysiological measures during an imitation-inhibition task and personal traits, 19th World Congress of Psychophysiology (IOP2018), Italy, Sep 2018

Ikeda Y, Nishimura Y, Higuchi S, Effects of Observer's Mental State on Mirror Neuron System Activity, 19th World Congress of Psychophysiology (IOP2018), Italy, Sep 2018

Ohashi M, Lee SI, Takeoka K, Eto T, Tarumizu C, Matsuoka S, Yasuo S, Higuchi S, Effects of Intake of L-Serine on Circadian Phase in Real Life, International Symposium on Biological Rhythms, Japan, Oct 2018

< 国内発表 >

西村悠貴、池田悠稀、樋口重和、自動模倣抑制訓練がミラーシステム活動に与える影響、第 35 回日本生理心理学会大会、2017 年 5 月

池田悠稀、西村悠貴、樋口重和、内受容感覚の敏感さとミラーシステム活動の関連、第 35 回日本生理心理学会大会、2017 年 5 月

林小百合、和田宏子、樋口重和、キムヨンキュ、乳幼児の母親における年齢と短期記憶課題成績の関連についての研究、第 35 回日本生理心理学会大会、2017 年 5 月

樋口重和、子どもの夜の光に対する高い感受性と概日リズム、第 35 回日本生理心理学会大会、2017 年 5 月（招待講演）

北村真吾、三島和夫、樋口重和、李相逸、許慧敏、低年齢の児童は高年齢の児童と比較して体内時計と睡眠の結びつきが強く就寝時のメディア使用の影響を受けやすい、日本睡眠学会第 42 回定期学術集会、2017 年 6 月

野口 杏奈、津山 卓也、木之下 早紀、李 相逸、阿波田 康裕、樋口 重和、夜勤時の色温度照度可変の LED 照明が概日リズム位相と眠気に与える影響、日本生理人類学会第 75 回大会、2017 年 6 月

江藤太亮、松森孝平、李相逸、樋口重和、瞳孔の対光反射のスペクトル感度に関する研究：大人と子どもの比較、日本生理人類学会第 75 回大会、2017 年 6 月

李相逸、樋口重和、夜勤中の光によるメラトニン分泌抑制や概日リズムの位相後退をいかに防ぐか、第 24 回日本時間生物学会学術大会、2017 年 10 月

江田裕貴、西村悠貴、池田悠稀、磯田和生、樋口重和、曲面ディスプレイに映された顔表情が事象関連電位に与える影響、日本生理人類学会第 76 回大会、2017 年 11 月

西村佳菜、李相逸、北村真吾、樋口重和、子どもの概日リズムと自然の明暗サイクルの同調に関する研究、日本生理人類学会第 76 回大会、2017 年 11 月

木之下早紀、野口杏奈、李相逸、阿波田康裕、樋口重和、夜勤時の短時間光曝露がメラトニン分泌と眠気に与える影響、日本生理人類学会第 76 回大会、2017 年 11 月

西村悠貴、池田悠稀、林小百合、元村祐貴、樋口重和、模倣抑制課題による脳内ミラーシステム活動変化とその個人差についての検討、第 36 回日本生理心理学会、2018 年 5 月

樋口重和、光と適応、日本生理人類学会第 77 回大会、2018 年 6 月（招待講演）

岡田 真一、神尾陽子、北村真吾、樋口 重和、三島和夫、一般児童における睡眠と情緒・行動上の問題との関連、日本生理人類学会第 77 回大会、2018 年 6 月

黒川修行、野井真吾、鹿野晶子、千竈健人、北村真吾、樋口重和、小児期における睡眠と初経発来時期の関係について、日本生理人類学会第 77 回大会、2018 年 6 月

榎本みのり、北村真吾、肥田昌子、樋口重和、岡田(有竹)清夏、三島和夫、睡眠負債に対する耐性－クロノタイプ別の検討－、日本生理人類学会第 77 回大会、2018 年 6 月

池田悠稀、西村悠貴、樋口重和、観察者の心的状態がミラーニューロンシステムの活動に及ぼす影響、日本生理人類学会第 77 回大会、2018 年 6 月

大橋路弘、李相逸、武岡功汰、江藤太亮、垂水千恵、松岡小百合、安尾しのぶ、樋口重和、実生活における L-Serine 摂取が概日リズムの光同調に及ぼす影響、日本生理人類学会第 77 回大会、2018 年 6 月

黒瀬亮成、キムヨンキュ、吉田大樹、林小百合、池田悠稀、樋口重和、元村祐貴、眼球指標を用いた情動推定に関する研究、日本生理人類学会第 77 回大会、2018 年 6 月

江藤太亮、武岡功汰、李相逸、北村真吾、樋口重和、自然環境での光曝露が子どもの瞳孔の対光反射に及ぼす影響、日本睡眠学会第 43 回定期学術集会、2018 年 7 月

李相逸、樋口重和、夜勤仮眠中の漸増光照射と睡眠慣性および概日リズム、日本睡眠学会第 43 回定期学術集会、2018 年 7 月

樋口重和、西村佳菜、江藤太亮、李相逸、北村真吾、鹿野晶子、野井真吾、自然の光環境でのキャンプ生活が子どもの概日リズムに及ぼす影響、日本睡眠学会第 43 回定期学術集会、2018 年 7 月

榎本みのり、北村真吾、肥田昌子、樋口重和、岡田（有竹）清夏、三島和夫、クロノタイプ別の睡眠負債耐性の違い、日本睡眠学会第 43 回定期学術集会、2018 年 7 月

江藤太亮、西村佳菜、武岡功汰、李相逸、鹿野晶子、野井真吾、北村真吾、樋口重和、自然の明暗サイクルに従った睡眠/覚醒リズムが子どものメラトニン分泌特性に及ぼす影響、第 25 回日本時間生物学会学術大会、2018 年 10 月

樋口重和、個人における時刻合わせ問題：学童期および青年期、第 25 回日本時間生物学会学術大会、2018 年 10 月（招待講演）

樋口重和、日本生理人類学会のこれから、日本生理人類学会第 78 回大会、2018 年 10 月（招待講演）

林小百合、鶴彩美、岸田文、元村祐貴、樋口重和、卵胞期/黄体期における情動・衝動抑制の変化についての検討、日本生理人類学会第 78 回大会、2018 年 10 月

武岡功汰、江藤太亮、李相逸、北村真吾、樋口重和、子どもの光曝露履歴と夜の光感受性に関する研究、日本生理人類学会第 78 回大会、2018 年 10 月

野口杏奈、眞子杜都、江藤太亮、阿波田康裕、樋口重和、概日リズムを考慮した夜勤時の照明条件の検討、日本生理人類学会第 78 回大会、2018 年 10 月

江田裕貴、西村悠貴、池田悠稀、久永一郎、磯田和生、樋口重和、曲面ディスプレイが表情の認知活動に及ぼす影響、日本生理人類学会第 78 回大会、2018 年 10 月

江藤太亮、樋口重和、プルキンエ像のコントラストを指標とした水晶体分光透過率の測定システムの検討、日本視覚学会 2019 年冬季大会、2019 年 1 月

【その他】

< 受賞 >

日本生理人類学会第 75 回大会 優秀発表賞、江藤太亮、瞳孔の対光反射のスペクトル感度に関する研究：大人と子どもの比較、2017 年 6 月

日本生理人類学会第 76 回大会 優秀発表賞、木之下早紀、夜勤時の短時間光曝露がメラトニン分泌と眠気に与える影響、2017 年 6 月

日本生理人類学会第 77 回大会 優秀発表賞、大橋路弘、実生活における L-Serine 摂取が概日リズムの光同調に及ぼす影響、2018 年 6 月

第 25 回日本時間生物学会学術大会 優秀ポスター賞、江藤太亮、自然の明暗サイクルに従った睡眠/覚醒リズムが子どものメラトニン分泌特性に及ぼす影響、2018 年 10 月

日本生理人類学会第 78 回大会 優秀発表賞、林小百合、卵胞期/黄体期における情動・衝動抑制の変化についての検討、2018 年 10 月

<メディア掲載>

NHK あさいち、夜の照明環境と睡眠や生体リズムの関係について、2017年10月放送

松隈浩之

【論文】

松隈浩之「高齢者を対象としたリハビリ・ヘルスケア用シリアスゲームのデザインおよび制作プロセスに関する研究」,九州大学大学院芸術工学研究院, 2018年度, 博士論文

Matsuguma H, Zaitu K, Higuchi S, "Game Design Proposal through Verification of Game "Locomo de Balamingo"" , International journal of Asia digital art and design、Vol.21, No.4(2018)

松隈浩之、財津康輔、仲村有希、眞玉優美、服部文忠「半側空間無視リハビリ訓練用ゲームのデザイン提案—『たたけ！バンバン職人』の制作、検証を通して—」,日本デジタルゲーム学会 (DiGRA JAPAN) (2018)

【学会発表】

<国際発表>

Anraku K,Matsuguma H., Production of Games for Vision Training Support of People with Developmental Disabilities., Asia Digital Art and Design Association 2018, 2018.11.

Matsunoshita T,Matsuguma H., Content Production to Enhance the Relationship between the Game and the Player., Asia Digital Art and Design Association 2018, 2018.11.

<国内発表>

Matsuguma H, A study of serious game for healthcare and rehabilitation, 第1回シリアス&アブライドゲームサミット, 2017.02.

松隈浩之、梶原治朗、服部文忠、有江勝利、起立訓練支援用ゲーム『リハビリウム 起立の森』: 医療・ヘルスケアの現場におけるゲーム利用, CEDEC2017, 2017.08.

松隈浩之、妹尾武治、中島弘貴、(心理学！+運動生理学！)×ゲーム学！！:ヘルスケアゲームの効果的なデザインとは。 , CEDEC + Kyushu, 2017.10.

松隈浩之、村木里志、妹尾武治、足踏み運動支援用ゲーム『リハビリウム アシブミジョーズ』:ヘルスケアの現場におけるゲーム利用, CEDEC2018, 2018.08.

田中利佳、村岡咲希、松隈浩之、(運動生理学+視覚心理学とのコラボ！) 高齢者の足踏み運動をサポートするシリアスゲーム「リハビリウム アシブミジョーズ」, CEDEC + Kyushu, 2018.12.

【その他】

<メディア掲載>

2017.06, 【テレビ】FBS「バリはやッ！ZIP!」, 「ロコモ運動サークル」が紹介.

2017.07, 市政だより南区版, 「ロコモ運動サークル」の活動が紹介.

2017.09, NHK 総合『おはよう日本』, 松隈研究室の取り組み (制作ゲーム・学生の活動) の紹介

2017.09, NHK 総合『ロクいち！福岡』, 松隈研究室の取り組み (制作ゲーム・学生の活動) 紹介.

2017.10, Red Bull, 制作ゲーム「起立の森」が CEDEC2017 への出展で紹介 .

2017.11, NHK 総合『おはよう日本』全国版, 松隈研究室の取り組みが紹介 .

2018.01, 朝日新聞朝刊, インタビュー記事「ゲームの可能性広げたい」が掲載 .

2018.02, 西日本新聞朝刊, 小・中学生のこども記者さんによる、『西日本新聞 こどもタイムズ』にて松隈研究室の取り組みが紹介 .

2018.06, 日本経済新聞, 『ポスト平成の未来学』にてシリアスゲームプロジェクトの取り組みが掲載.

2018.10, RKB 毎日放送, 『The Creators』にて、シリアスゲームプロジェクトの取り組みが放映.

平松千尋

【論文】

Hiramatsu C, Melin AD, Allen WL, Dubuc C, Higham JP. Experimental evidence that primate trichromacy is well suited for detecting primate social colour signals. Proc. R. Soc. B 284: 20162458. 2017 (doi:10.1098/rspb.2016.2458)

Hiramatsu C, Paukner A, Kuroshima H, Fujita K, Suomi SJ, Inoue-Murayama M. Short poly-glutamine repeat in the androgen receptor in New World monkeys. Meta Gene 14: 105-113. 2017 (doi:10.1016/j.mgene.2017.08.006)

Hogan JD, Fedigan LM, Hiramatsu C, Kawamura S, Melin AD. Trichromatic perception of flower colour improves resource detection among New World monkeys. Scientific Reports 8: 10883. 2018 (doi:10.1038/s41598-018-28997-4)

Jacobs RL, Veilleux CC, Louis Jr EE, Herrera JP, Hiramatsu C, Frankel DC, Irwin MT, Melin AD, Bradley BJ. Less is more: lemurs (Eulemur spp.) may benefit from loss of trichromatic vision. Behavioral Ecology and Sociobiology: 73:22. 2019 (https://doi.org/10.1007/s00265-018-2629-9)

【学会発表】

<国際発表>

Mori Y, Hiramatsu C, Color-Temperature Association in Dichromatic and Trichromatic Individuals, The 33rd Annual Meeting of the International Society for Psychophysics (Fechner Day 2017), 2017.10.

Hiramatsu C, Function of Color Vision in Primates, The 33rd Annual Meeting of the International Society for Psychophysics (Fechner Day 2017), 2017.10.

Paulus YT, Hiramatsu C, Kam Y, Remijn BR, Measurement of viewing distances and angles for eye tracking under different lighting conditions, 2nd International Conference on Automation, Cognitive Science, Optics, Micro Electro-Mechanical System, and Information Technology, ICACOMIT 2017, 2018.01.

Paulus YT, Remijn GB, Kam Y, Hiramatsu C, The use of glasses during registration into a low-cost eye tracking device under different lighting conditions, 2nd International Conference on Automation, Cognitive Science, Optics, Micro Electro-Mechanical System, and Information Technology, ICACOMIT 2017, 2018.01.

Hiramatsu C, Takashima T, Sakaguchi H, Tajima S, Seno T, Influence of color vision variation on art appreciation, International Symposium 「Towards Understanding "INDIVIDUALITY"」, 2018.07.

Hiramatsu C, Takashima T, Sakaguchi H, Tajima S, Seno T, Attention and impression toward complex images among individuals with different color vision types, The 3rd International Five-Sense Symposium (5-SENSE 2018), 2018.09.

Mori Y, Hiramatsu C, Development of color-temperature association in individuals with different color vision types, The 3rd International Five-Sense Symposium (5-SENSE 2018), 2018.09.

Paulus YT, Herlina, Leni KZ, Hiramatsu C, Remijn GB, A Preliminary Experiment on Grid Densities for Visual Password Formats, 9th International Conference on Awareness Science and Technology, iCAST 2018, 2018.10.

Hiramatsu C, Variations in human color vision beyond perceptual differences, The 4th Asia Color Association Conference, 2018.12.

Hiramatsu C, Evolutionary changes in the, function and diversity of color vision in primates, The 9th Federation of the Asian and Oceanian Physiological Societies Congress (FAOPS2019), 2019.03 (invited).

< 国内発表 >

平松千尋, 色覚の多様性からとらえる個性の総合的研究, 新学術領域「個性」創発脳 第2回領域会議, 2017.07.

森優希, 平松千尋, 三色覚者と二色覚者の色-温度関連づけ, 第九回多感覚研究会, 2017.12.

森優希, 平松千尋, 3色覚者と2色覚者の色-温度関連づけ, 日本生理人類学会研究奨励発表会(九州地区), 2018.02.

森優希, 平松千尋, 見た目の色と温度の関連づけにおける色覚多様性の影響, 第77回日本生理人類学会, 2018.06.

平松千尋, 山下友子, 杉野強, 中島祥好, 綿貫宏史朗, 友永雅己, 多変量解析による霊長類音声の比較, 第34回日本霊長類学会大会, 2018.07.

平松千尋, 遺伝子と経験が作り出す色覚多様性, 新学術領域「個性」創発脳第3回領域会議, 2018.07.

Hiramatsu C, Takashima T, Sakaguchi H, Tajima S, Seno T, Kawamura S, Individual differences in gaze patterns and visual impressions are attributed to polymorphic color vision, 第41回日本神経科学大会, 2018.07.

尾田凌祐, 平松千尋, 見た目の温かさにおける色と光沢の関係性, 新学術領域 多元質感知 第7回領域班会議, 2019.03.

【その他】

< 監修 >

尾家宏昭(著), 平松千尋(監修), 金孝源(イラスト), 田代しんたろう(その他), 検査のまえによむ色覚の本, しきかく学習カラーメイト, 2019.01.

< メディア掲載 >

読売新聞(夕刊), 西日本新聞, Science Portal, Academist Journal, NPR(National Public Radio) 他, 色覚進化と顔色変化検出のかかわりを調べた研究の成果について, 2017年6月

NHK, ダーウィンが来た! 生き物新伝説 第524回「白黒つけます! シマウマの謎」において解説, 2017年10月

中日こどもウィークリー, 色覚の仕組みや顔色を見分けることの意義について解説, 2017年12月

元村祐貴

【著書】

元村祐貴: 睡眠負債による脳機能への影響(特集 睡眠負債) 12(3), 337-343, 2018

【論文】

Hida A, Ohsawa Y, Kitamura S, Nakazaki K, Ayabe N, Motomura Y, Matsui K, Kobayashi M, Usui A, Inoue Y, Kusanagi H, Kamei Y, Mishima K, Evaluation of circadian phenotypes utilizing fibroblasts from patients with circadian rhythm sleep disorders. Transl Psychiatry, 7(4): e1106, 2017., 2017.04.

Motomura Y, Kitamura S, Nakazaki K, Oba K, Katsunuma R, Terasawa Y, Hida A, Moriguchi Y, Mishima K., Recovery from Unrecognized Sleep Loss Accumulated in Daily Life Improved Mood Regulation via Prefrontal Suppression of Amygdala Activity. Front Neurol. 8:306. 2017, 2017.07.

Hakamata Y, Komi S, Moriguchi Y, Izawa S, Motomura Y, Sato E, Mizukami S, Kim Y, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H, Amygdala-centred functional connectivity affects daily cortisol concentrations: a putative link with anxiety. Sci Rep, 2017.08.

Motomura Y, Katsunuma R, yoshimura M, Mishima K, Two Days' Sleep Debt Causes Mood Decline During Resting State Via Diminished Amygdala-Prefrontal Connectivity, SLEEP, 2017.10, Study objectives

Katsunuma R, Oba K, Kitamura S, Motomura Y, Terasawa Y, Nakazaki K, Hida A, Moriguchi Y, Mishima K., Unrecognized sleep loss

accumulated in daily life can promote brain hyperreactivity to food cue. SLEEP, 2017.10.

Sayuri Hayashi, Hiroko Wada, Sung-Phil Kim, Yuki Motomura, Shigekazu Higuchi, Yeon-Kyu Kim, Enhanced Nogo-P3 amplitudes of mothers compared with non-mother women during an emotional Go/Nogo task: Journal of Physiological Anthropology, 2018.04.

Hakamata, Yuko; Mizukami, Shinya; Komi, Shotaro; Sato, Eisuke; Moriguchi, Yoshiya; Motomura, Yuki; Maruo, Kazushi; Izawa, Shuhei; Kim, Yoshiharu; Hanakawa, Takashi; Inoue, Yusuke; Tagaya, Hirokuni, Attentional bias modification alters intrinsic functional network of attentional control: A randomized controlled trial, JOURNAL OF AFFECTIVE DISORDERS, 10.1016/j.jad.2018.06.018, 238, 472-481, 2018.10.

元村 祐貴, 脳と適応・順応: 生理人類学における脳研究のこれまでとこれから, 日本生理人類学会誌, 2019年23巻4号 p.185-187.

西村英伍, 元村祐貴, 勝沼り, 吉村道孝, 三島和夫, 尾方義人, 機械学習を用いた動画解析による生体情報の自動追跡技術: 脳裂幅計測に用いた一例, 日本生理人類学会誌, 2019年24巻1号 p. 35-45

【学会発表】

< 国際発表 >

Yuki Motomura, Shingo Kitamura, Kyoko Nakazaki, Kentaro Oba, Ruri Katsunuma, Yuri Terasawa, Akiko Hida, Yoshiya Moriguchi, Kazuo Mishima: Recovery from unrecognized sleep debt accumulated in daily life improved mood regulation: arterial spin labeling fMRI study, ASRS2018 2018.07

Sayuri Hayashi, Ayami Tsuru, Fumi Kishida, Shigekazu Higuchi, Yuki Motomura, Psychological effect of the menstrual cycle on an emotional Go/Nogo task and its relation to plasma oxytocin and prolactin levels in healthy women, The Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences2019, 2019年03月

< 国内発表 >

元村祐貴, 勝沼り, 吉村道孝, 三島和夫, 睡眠負債時における顔表情認知と情動伝染, 日本睡眠学会第42回定期学術集会, 2017.06.

元村祐貴, 北村真吾, 中崎恭子, 大場健太郎, 勝沼り, 寺澤悠里, 肥田昌子, 守口善也, 三島和夫, 視床を中心とする脳内ネットワークと主観的眠気の関連: 安静時 fMRI による検討, 第76回日本生理人類学会, 2017.09.

西村悠貴, 池田悠稀, 林小百合, 元村祐貴, 樋口重和, 模倣抑制課題による脳内ミラーシステム活動変化とその個人差についての検討, 第36回日本生理心理学会大会, 2018年05月

吉田大樹, 金亮奎, 黒瀬亮成, 林小百合, 池田悠稀, 樋口重和, 元村祐貴, 事象関連同期/脱同期を用いた情動推定に関する研究, 第36回日本生理心理学会大会, 2018年05月

黒瀬亮成, キムヨンキュ, 吉田大樹, 林小百合, 池田悠稀, 樋口重和, 元村祐貴, 眼球指標を用いた情動推定に関する研究, 日本生理人類学会第77回大会, 2018年06月

元村祐貴, 北村真吾, 中崎恭子, 大場健太郎, 勝沼り, 寺澤悠理, 肥田昌子, 守口善也, 三島和夫: 睡眠習慣と安静時脳活動の関連: ASL-fMRIを用いた検討, 日本生理人類学会第77回大会 2018.06

林小百合, 鶴彩美, 元村祐貴, 岸田文, 綿貫茂喜, 樋口重和, 卵胞期/黄体期における情動・衝動抑制の変化についての検討, 日本生理人類学会第78回大会, 2018年10月

元村祐貴, 勝沼り, 北村真吾, 綾部直子, 吉村道孝, 肥田昌子, 三島和夫: 精神運動ヴィジランス課題時の脳活動第78回日本生理人類学会, 2018.10.

元村祐貴, 北村真吾, 大場健太郎, 寺澤悠理, 榎本みのり, 肥田昌子, 守口善也, 樋口重和, 三島和夫: 無意識的な情動伝達経路の役割: 眠気と閾下呈示された恐怖表情刺激に対する扁桃体活動の関連, 第11回人間行動進化学会, 2018年12月

【その他】

<受賞>

第76回日本生理人類学会優秀発表賞、元村祐貴、北村真吾、中崎恭子、大場健太郎、勝沼り、寺澤悠里、肥田昌子、守口善也、三島和夫、視床を中心とする脳内ネットワークと主観的眠気の関連：安静時fMRIによる検討、2017.09.

第78回日本生理人類学会優秀発表賞、林小百合、鶴彩美、元村祐貴、岸田文、綿貫茂喜、樋口重和、卵胞期/黄体期における情動・衝動抑制の変化についての検討、2018.10.

<メディア掲載>

元村祐貴：危ない！睡眠負債、Clim（雑誌） 10月号 p46-49

橋彌和秀

【著書】

橋彌和秀、『ギャバガイ！「動物のことは」の先にあるもの』（訳）、(Premack, D. (1986). GAVAGAI! Or the Future History of the Animal Language Controversy.), (pp.252), 勁草書房, 2017

橋彌和秀,「あたりまえの根っこ」としての進化理論, (pp.190-191) , 『進化心理学を学びたいあなたへーバイオニアからのメッセージ』（王曉田 蘇彦捷編）, 東京大学出版会, 2018

【論文】

Meng X, Murakami T, Hashiya K. Working memory affects children's interpretations of explicit but not ambiguous questions: research on links between phonological loop and referent assignment. PLoS ONE. 12(10): e0187368. Open Access, 2018

Hashiya, K, Meng, X, Uto, Y, & Tajiri, K. Overt congruent facial reaction to dynamic emotional expressions in 9–10-month-old infants. Infant Behavior and Development, 54, 48-56. 10.1016/j.infbeh.2018.12.002, 2019

【学会発表】

<国際発表>

Hashiya K, Kobayashi H, Maeyama K, Nitta H, Hakarino K, Tojo T, Hasegawa T, Nuances of "we": the effect of utterance contexts on the distribution task performances in children with/without ASD, BCCCD18 Budapest CEU Conference on Cognitive Development, Budapest, January, 2018

Yamate A, Hashiya K, Development of Expectation for Retributive Justice, or “Karma” in childhood, BCCCD18 Budapest CEU Conference on Cognitive Development, Budapest, January, 2018

Uto Y, Hashiya K, Four-year-old Children Selectively Imitate the Other's “Intentional” Action with Taking Interjection as a Cue, BCCCD18 Budapest CEU Conference on Cognitive Development, Budapest, January, 2018

Kishimoto R, Itakura S, Fujita K, Hashiya K, Preschoolers’ Social Evaluations of Others’ Strategically Public Displays of Prosocial Behavior, BCCCD18 Budapest CEU Conference on Cognitive Development, Budapest, January, 2018

Hashiya K, Reading mind / assuming mind in human communication: a developmental perspective. Symposium "Intention Sharing and Language Evolution"("Evolinguistics 2018"), The University of Tokyo, Tokyo, August 4th, 2018.

Hashiya K, Kobayashi H, Uto Y, Yamate A, Hakarino K, Tojo T, Hasegawa T, Speaker identification based on epistemic reasoning in children with/without ASD: a test with the “knowledge-based ventriloquism illusion” task, BCCCD19 Budapest CEU Conference on Cognitive Development, Budapest, January, 2019

<国内発表>

橋彌和秀, 他者の痛みを感じるこころの発達とその基盤：共感性を手掛かりに, 「いたいいたいのとんでいけー子どもの痛みの意味を考える～」, 公益財団法人成長科学協会公開シンポジウム, UDX シアター（東京都千代田区）, 2017年6月10日.

橋彌和秀, インタラクションの基盤としての「こころ」: 進化と発達からのアプローチ, 「認知的インタラクションデザイン学」公開講義, 京都工芸繊維大学（京都府京都市）, 2017年6月13日.

橋彌和秀, 共感—マキャベリの知性—心の理論, 第18回CAPS研究会, 関西学院大学（兵庫県西宮市）, 2017年7月3日.

孟憲巍、村上太郎、橋彌和秀, 語用論的解釈にワーキングメモリが及ぼす影響：幼児における指示対象付与と音韻ループの関連性に注目して, 日本赤ちゃん学会第17回学術集会, 久留米シティプラザ（福岡県久留米市）, 2017年7月8日～7月9日.

橋彌和秀, 『絆』の比較発達心理学—『こころ』・『わたしたち』という幻想の適応価, 日本思春期青年期精神医学会第30回大会 教育講演, 九州大学（福岡県福岡市）, 2017年7月23日.

孟憲巍、村上太郎、橋彌和秀, 幼児は多義的な質問をどのように解釈するのか？ 日本心理学会第81回大会, 久留米シティプラザ（福岡県久留米市）, 2017年9月20日～9月22日

斎藤慈子、池田功毅、小林洋美、橋彌和秀, 乳幼児養育中の母親における「かわいさ」の認知：刺激月齢による変化の検討, 日本心理学会第81回大会, 久留米シティプラザ（福岡県久留米市）, 2017年9月20日～9月22日

斎藤慈子、池田功毅、小林洋美、橋彌和秀, 「かわいさ」認知の刺激月齢による変化：母親と大学生の比較, 日本人間行動進化学会第10回大会, 名古屋工業大学（愛知県名古屋市）, 2017年12月9日～12月10日.

新田博司、橋彌和秀, 自己顔と他者顔の間～合成顔を用いた検討～, 日本人間行動進化学会第10回大会, 名古屋工業大学（愛知県名古屋市）, 2017年12月9日～10日.

Seki M, Hashiya K, Is Maternal Grandmother Nearest and Dearest? Replication Survey of Grandparent-Grandchild Relationships, 日本人間行動進化学会第10回大会, 名古屋工業大学（愛知県名古屋市）, 2017年12月9日～10日.

孟憲巍、橋彌和秀, 教えることの起源：1歳半児が示す「他者の心的状態の差異を踏まえた上での情報提供」, 次世代脳プロジェクト・冬のシンポジウム2017, 一橋大学一橋講堂（東京都千代田区）, 2017年12月20日～22日.

新田博司、橋彌和秀, 乳児期における自己顔への感受性～合成顔を用いた検討～, ヒューマンコミュニケーション基礎研究会1月研究会, 第一工業大学（鹿児島県国分市）, 2018年1月26日～27日.

孟憲巍、橋彌和秀, 教えることの発達の起源, 「共感性の進化・神経基盤」第五回領域会議, 東京大学（東京都千代田区）, 2018年3月8日～9日.

宇土裕亮、橋彌和秀, 間投詞発話が他者の意図推論に及ぼす影響, 「共感性の進化・神経基盤」第五回領域会議, 東京大学（東京都千代田区）, 2018年3月8日～9日.

山手秋穂、橋彌和秀, Development of expectation of retributive justice, or "karma" in childhood, 「共感性の進化・神経基盤」第五回領域会議, 東京大学（東京都千代田区）, 2018年3月8日～9日.

新田博司、橋彌和秀, 乳児期の自己顔への感受性：合成顔に対する視覚的選好からの検討, 「共感性の進化・神経基盤」第五回領域会議, 東京大学（東京都千代田区）, 2018年3月8日～9日.

中分遙、孟憲巍、橋彌和秀, 乳児の超自然的行為者に対する社会的評価, 日本赤ちゃん学会第18回学術集会, 東京大学本郷キャンパス（東京都千代田区）, 2018年7月6日～7月8日.

富士直斗、土屋勝太、橋彌和秀, 距離判断におけるドラップラー効果手がかりの利用, 日本赤ちゃん学会第18回学術集会, 東京大学本郷キャンパス（東京都千代田区）, 2018年7月6日～7月8日

橋彌和秀, 教育の生物学的基盤—進化か文化か—, 日本教育心理学会第60回総会, 慶応義塾大学日吉キャンパス（神奈川県横浜市）, 2018年9月15日～9月17日.(招待講演)

小林洋美、新田博司、前山航輝、計野浩一郎、東條吉邦、長谷川壽一、橋
彌和秀, *Catchers of the Lies*: 「わたしたち」にまつわる利他的／利己的な
嘘のニュアンスが TD／ASD 児者による資源配分に及ぼす影響, 日本心理
学会第 8 2 回大会, 東北大学仙台国際センター (東京都宮城県仙台
市), 2018 年 9 月 25 日～9 月 27 日.

中分遙、孟憲巍、Burdett E、Jong J、Whitehouse H、橋彌和秀, 宗教性
と社会的優位性の初期発達, 日本心理学会第 8 2 回大会, 東北大学仙台国際
センター (東京都宮城県仙台市), 2018 年 9 月 25 日～9 月 27 日.

井上裕香子、清成透子、橋彌和秀, “利他的” な嘘は許容されるのか？嘘
の内容が信頼性評価に与える影響, 日本心理学会第 8 2 回大会, 東北大学仙
台国際センター (東京都宮城県仙台市), 2018 年 9 月 25 日～9 月 27 日.

橋彌和秀, ソフトウェアとしてのこころの進化, 先端科学考究, 総合研究大
学院大学 (神奈川県三浦郡), 2019 年 1 月 15 日.(招待講演)

橋彌和秀、小林春美、大坪康介、森口祐介、狩野文浩、松井智子、木下孝
司、「こころ」と「こころの理論」: Theory of Mind 概念に再接近する、
日本発達心理学会第 30 回大会, 早稲田大学 (東京都新宿区), 2019 年 3
月 17 日～2019 年 3 月 19 日.

橋彌和秀、齋藤慈子、川口ゆり、小原一馬、床呂郁哉、金沢創、「かわ
い」の進化と文化, 日本発達心理学会第 30 回大会, 早稲田大学 (東京都
新宿区), 2019 年 3 月 17 日～2019 年 3 月 19 日.

橋彌和秀, 私から見る体／体から見る私: 乳幼児発達研究から、愛媛大学
知覚研究会, 愛媛大学城北キャンパス (愛媛県松山市), 2019 年 3 月 28
日.(招待講演)

綿貫茂喜

【論文】

Nishimura T, Katsumura T, Motoi M, Oota H, Watanuki S.
Experimental evidence reveals the UCP1 genotype changes the oxygen
consumption attributed to non-shivering thermogenesis in humans,
Scientific Reports, 7(1):5570, 2017. (doi: 10.1038/s41598-017-05766-3)

Yasukochi Y, Nishimura T, Motoi M, Watanuki S. Association of EGLN1
genetic polymorphisms with SpO2 responses to acute hypobaric
hypoxia in a Japanese cohort, Journal of Physiological Anthropology,
37(1) 9, 2018. (doi: 10.1186/s40101-018-0169-7)

綿谷 昌明, 綿谷 睦子, 白川 剛, 河上 賢一, 川端 悠士, 綿貫 茂喜, 神経動力学
検査による下肢末梢神経系の可動性に関する量的な検討, 理学療法科学,
33(1), 133-139, 2018. (doi: 10.1589/rika.33.133)

Choi D, Tsuji H, Watanuki S. Association between oxytocin receptor
gene rs53576 polymorphism and behavioral inhibition/activation
system (BIS/BAS) sensitivity, Personality and Individual Differences,
121, 223-226, 2018. (doi: 10.1016/j.paid.2017.09.001)

【学会発表】

< 国際発表 >

Kishida F, Watanuki S. The relation of the effects of others presence
stimulus on cognitive process of attention with personal traits. 2017
Symposium of the Society for the Study of Human Biology &
International Association of Physiological Anthropology, Sep 2017

Egashira Y, Watanuki S. Serotonin transporter (5-HTTLPR) and
oxytocin receptor (OXTR rs53576) gene polymorphisms related to
personality traits and the maintenance of social group. 2017
Symposium of the Society for the Study of Human Biology &
International Association of Physiological Anthropology, Sep 2017

Motoi M, Kishida F, Watanuki S. The Relationship between 5-HTTLPR
and Event-Related Potential (ERP) During Anticipation of Affective
Picture. International Symposium on physiological Anthoropology, Oct
2018

Motoi M, Kishida F, Watanuki S. The relationship between 5-HTTLPR
and Event-related Potentials (ERPs) during picture processing in
anticipation task. Russian-Japanese Scientific Symposium, Dec 2018

< 国内発表 >

崔 多美, 綿貫茂喜. 行動活性化システム感受性と異性の顔に対する注意反
応との関連: 事象関連電位研究. 第 35 回日本生理心理学会大会, 2017 年 5
月

西村貴孝, 大西真由美, 西原三佳, Juan Ugarte, 安河内彦輝, 福田英輝, 安
部恵代, 有馬和彦, 富田義人, 本井 碧, 綿貫茂喜, 青柳 潔. ボリビア高地集団
における循環動態の適応とその性差について. 日本生理人類学会第 75 回
大会, 2017 年 6 月

岸田 文, 綿貫茂喜. 他者が存在するという刺激が注意の認知過程に及ぼす
影響と性格特性の関連. 日本生理人類学会第 75 回大会, 2017 年 6 月

江頭優佳, 中島孝明, 綿貫茂喜. 喫煙が生理心理反応に及ぼす影響 -不快情
動時の反応- 第 2 報. 日本生理人類学会第 76 回大会, 2017 年 11 月

西村英伍, 辻本寛治, 藤田萌花, 江頭優佳, 中島孝明, 能登裕子, 大草孝介, 長
津結一郎, 縄田健悟, 小崎智照, 藤智亮, 中村美亜, 尾方義人, 前田享史, 綿貫
茂喜. 未来の安心のための災害避難所に関するレジリエンスアシストサー
ビス実装の可能性調査. 九州大学高等研究院・九州先端科学技術研究所
研究交流会, 2018 年 1 月

中島孝明, 西村英伍, 江頭優佳, 尾方義人, 藤 智亮, 綿貫茂喜. 創造的活
動時発想に対する評価を反映する生理指標の検討. 平成 29 年度日本生理
人類学会研究奨励発表会 (九州地区), 2018 年 2 月

西村英伍, 辻本寛治, 藤田萌花, 中島孝明, 江頭優佳, 能登裕子, 藤智亮, 尾方
義人, 綿貫茂喜. 機械学習によるレジリエンス行動の抽出. 平成 29 年度日
本生理人類学会研究奨励発表会(九州地区), 2018 年 2 月

岸田文, 太田将太郎, 綿貫茂喜. 避難所での心理的負担を軽減するための
防災教育の基礎的検討. 九州大学応用生理人類学研究センターレジリエ
ンス研究特別講演会, 2018 年 3 月

黒田知宏, 綿貫茂喜. 避難所環境で想定される低温低湿度が脳活動に与え
る影響. 九州大学応用生理人類学研究センターレジリエンス研究特別講演
会, 2018 年 3 月

中島孝明, 綿貫茂喜. 能動的活動の有無を評価する生理指標の検討. 九州大
学応用生理人類学研究センターレジリエンス研究特別講演会, 2018 年 3 月

辻 春奈, 中島孝明, 綿貫茂喜. 音楽を体験することの生理的有用性. 九州
大学応用生理人類学研究センターレジリエンス研究特別講演会, 2018 年 3
月

西村貴孝, 大西真由美, 西原三佳, Juan Ugarte, 安河内彦輝, 福田英
輝, 安部恵代, 有馬和彦, 富田義人, 本井 碧, 綿貫茂喜, 青柳 潔. ボリビ
ア高地集団における循環動態の高度差による影響. 日本生理人類学会第 77
回大会, 2018 年 6 月

岸田 文, 中島孝明, 大草孝介, 能登裕子, 藤 智亮, 尾方義人, 綿貫茂喜.
個人の特性に適した防災教育基礎的検討. 日本生理人類学会第 77 回大会,
2018 年 6 月

江頭優佳, 岸田 文, 中島孝明, 綿貫茂喜. 異なる湿度環境が聴覚オドボー
ル課題時の振幅に及ぼす影響. 日本生理人類学会第 77 回大会, 2018 年 6
月

Jin-Hun Sohn, E-Nae Cheong, Chaejoon Cheong, Shigeki Watanuki.
Differential activation of the prefrontal cortex to visual food stimuli in
major depressive disorders. 日本生理人類学会第 78 回大会, 2018 年 10
月

岸田 文, 本井 碧, 西村英伍, 尾方義人, 藤 智亮, 大草孝介, 綿貫茂喜.
援助要請行動の抑制要因と性格特性の関連 -役所への負の印象に着目し
て-. 日本生理人類学会第 78 回大会, 2018 年 10 月

本井 碧, 岸田 文, 綿貫茂喜. 情動予期時の事象関連電位とセロトニントラ
ンスポーター遺伝子多型の関連. 日本生理人類学会第 78 回大会, 2018 年
10 月

【その他】

<受賞>

日本生理人類学会第 75 回大会優秀発表賞, 西村貴孝, 大西真由美, 西原三佳, Juan Ugarte, 安河内彦輝, 福田英輝, 安部恵代, 有馬和彦, 富田義人, 本井 碧, 綿貫茂喜, 青柳 潔. ボリビア高地集団における循環動態の適応とその性差について . 日本生理人類学会第 75 回大会, 2017 年 6 月

日本生理人類学会 2018 年度論文奨励賞, Yasukochi Y, Nishimura T, Motoi M, Watanuki S. Association of EGLN1 genetic polymorphisms with SpO2 responses to acute hypobaric hypoxia in a Japanese cohort, Journal of Physiological Anthropology, 37(1) 9, 2018

日本生理人類学会第 78 回大会優秀発表賞, 本井 碧, 岸田 文, 綿貫茂喜. 情動予期時の事象関連電位とセロトニントランスポーター遺伝子多型の関連, 日本生理人類学会第 78 回大会, 2018 年 10 月

尾方義人

【著書】

尾方義人, レジリエンスデザイナー—人間の能力を活かした災害対策と社会協創(1) 天災は忘れた頃にやってくる 地域と共創していかなければならない, 住まいとでんき vol.29 2017 年 6 月号, 49-50pp, 日本工業出版

尾方義人, レジリエンスデザイナー—人間の能力を活かした災害対策と社会協創(2) なみふると てんでんこ その時と未来を考え抜いた言葉, 住まいとでんき vol.29 2017 年 7 月号, 45-46pp, 日本工業出版

尾方 義人, レジリエンスデザイナー—人間の能力を活かした災害対策と社会協創(3) 最近の防災・減災の傾向 自助 公助 共助 互助 自助・共助・公助の考え方, vol.29 2017 年 8 月号, 41-42pp, 日本工業出版

尾方義人, レジリエンスデザイナー—人間の能力を活かした災害対策と社会協創(4) 34mの津波とレジリエンス 普段の生活から準備につなげていくこと, 住まいと 1 でんき vol.29 2017 年 9 月号, 47-48pp, 日本工業出版

尾方義人, レジリエンスデザイナー—人間の能力を活かした災害対策と社会協創(5) 阪神淡路大震災から 22 年振り返るとローテクとハイテク 現場の生活を見ることの大切さ, 住まいとでんき vol.29 2017 年 10 月号, 41-42pp, 日本工業出版

尾方義人, レジリエンスデザイナー—人間の能力を活かした災害対策と社会協創(6) 防災・減災のサービス 行政サービスと避難所 避難所レジリエンスの痕跡としての貼り紙, 住まいとでんき vol.29 2017 年 11 月号, 43-44pp, 日本工業出版

尾方義人, レジリエンスデザイナー—人間の能力を活かした災害対策と社会協創(8) 防災・減災のシステム 災害対策基本法に基づく「地区防災計画」自助・共助の役割の重要性, 住まいとでんき vol.30 2018 年 1 月号, 43-44pp, 日本工業出版

尾方義人, レジリエンスデザイナー—人間の能力を活かした災害対策と社会協創(9) 地域の防災コミュニケーションモデルをつくる 「行動変容」と「共創」, 住まいとでんき vol.30 2018 年 2 月号, 49-50pp, 日本工業出版

尾方義人, レジリエンスデザイナー—人間の能力を活かした災害対策と社会協創(10) 海外の防災・減災 自分ごととして準備しておく, 住まいとでんき vol.30 2018 年 4 月号, 41-42pp, 日本工業出版

尾方義人, レジリエンスデザイナー—人間の能力を活かした災害対策と社会協創(11) 消防と救急 地域防災の中核である消防団, 住まいとでんき vol.30 2018 年 5 月号, 39-40pp, 日本工業出版

尾方義人, 住まいの IoT・AI(1) 住宅のスマート化の歴史①1960-1980 技術を使って何をするかをしっかり考える, 住まいとでんき vol.30 2018 年 7 月号, 51-52pp, 日本工業出版

尾方義人, 住まいの IoT・AI(3) AI/IoT と家事 人間がしたいこと さらにおもしろくする, 住まいとでんき vol.30 2018 年 10 月号, 51-52pp, 日本工業出版

尾方義人, 住まいの IoT・AI(4) AI/IoT とコンビニ 近い未来を感じさせる「無人コンビニ」, 住まいとでんき vol.30 2018 年 12 月号, 47-48pp, 日本工業出版

尾方 義人, 住まいの IoT・AI(5) AI/IoT とスポーツ コミュニケーション、信頼感、安心感が重要, 住まいとでんき vol.31 2019 年 1 月号, 49-50pp, 日本工業出版

尾方 義人, 住まいの IoT・AI(6) AI/IoT と倫理 最新技術な常に倫理とともに, 住まいとでんき vol.31 2019 年 2 月号, 55-56pp, 日本工業出版

尾方義人, 住まいの IoT・AI(7) 「過去の未来」の AI/IoT 私達はいつの時代も期待していた, 住まいとでんき vol.31 2019 年 3 月号, 45-46pp, 日本工業出版

【論文】

高品, 宋陽, 尾方 義人,, 高温圧縮に基づく茶廃棄物の無接着剤再利用研究, 建材とインテリア 184pp, ISSN 1673-0038 CN51-1683/TU, 2017 年 4 月

宋暢, 賀佳, 尾方義人,, レジリエンスについての行為分析に基づく製品設計中の応用研究, 中華民国設計学会第 22 回学術研究成果セミナー論文集—設計研究の科学性, 中華民国設計学会, 論文集 ISBN : 9789579868860, 673-682pp, 2017 年 5 月 27 日

Pin Gao, Yoshito Ogata, Jin Liu, Chang Song,, The Methods of Tea Waste Reutilization and Economic Benefits Analysis, 5th International Conference on Mechatronics, Materials, Chemistry and Computer Engineering (ICMMCE 2017), 418-423pp, Available Online September 2017.

高品, 尾方義人,, 高温圧縮に基づいて、茶廃棄物の種類と強度との関係について, 建材とインテリア雑誌 162pp, 2017 年 11 月

宋暢, 賀佳, 尾方義人,, Research on the image of sweeping robot based on the Artificial Neural Network, MATEC Web of Conferences 学会誌, EDP sciences, ISSN 2261-236X Vol.139, 59-85pp, 2017 年 12 月 5 日 (EI Compendex 収録), 2017 年 12 月

宋暢, 賀佳, 尾方義人,, A study of the psychological resilience of the elderly based on the Artificial Neural Network, 2018 2nd IEEE Advanced Information Management, Communicates, Electronic and Automation Control Conference 学会誌 Atlantis 出版社 2119-2123pp, 2017 年 12 月

尾方義人, 熊本地震におけるレジリエンスデザインに関する研究, DNP 文化振興財団 学術研究助成紀要 Vol.1, 2018 年 11 月 30 日, 24-44pp, 公益財団法人 DNP 文化振興財団

西村英伍, 李東海, 尾方義人,, 被災地におけるレジリエンスデザインに関する研究, 地区防災学会誌 13, 51-65pp, 2018 年 11 月 30 日

賀佳, 宋暢, 尾方義人,, 『現代デザイン事典』からプロダクトデザイン方法論研究の可能性を探る, 中国・雑誌名『流行色』50-53pp, 2019 年 1 月

西村英伍, 元村祐貴, 勝沼り, 吉村道孝, 三島和夫, 尾方義人,, 機械学習を用いた動画解析による生体情報の自動追跡技術: 眼瞼幅計測に用いた一例, 日本生理人類学会誌, 31, 1-7pp, 24(1) 35-45pp, 2019 年 2 月 25 日

賀佳, 尾方義人,, テキストマイニングを用いた日本『現代デザイン事典』からみる日本平成パッケージデザインの変遷, 中国・雑誌名『大衆文芸』129-130pp, 2019 年 12 月

【総説等】

尾方義人, 鶴真由子, 河内厚志,, 「九州北部豪雨被災地絵の持続的な支援の提案」 Thoughtless Resilience とはなにかに報告書, 2019 年 3 月

【学会発表】

(口頭)

柴田英俊, 辻本寛治, 尾方義人,, 足趾握手運動による園児足部レジリエンス—足育の為のレジリエンスメソッドの可能性—, 日本デザイン学会第 5 支部 平成 28 年度研究発表会, 2017 年 10 月 22 日

柴田英俊, 西村英伍, 尾方義人,, 多久市園児の足変形計測—変形改善のためのレジリエンスメソッドの可能性—, 日本デザイン学会第 5 支部 平成 28 年度研究発表会, 2017 年 10 月 22 日

河野圭紀, 尾方義人, 河内厚志, 福田佑輝,, スルマ族の身体装飾の造形分析, 日本デザイン学会第 5 支部 平成 29 年度研究発表会, 2017 年 10 月 22 日

西村英伍, 辻本寛治, 藤田萌花, 中島孝明, 江頭優佳, 能登裕子, 藤智亮, 尾方義人, 綿貫茂喜,, 動画と位置情報を用いた人のレジリエンス行動の生態心理学的観察, 日本デザイン学会第 5 支部 平成 29 年度研究発表会, 2017 年 10 月 22 日

李璐, 尾方義人,, レジリエンスデザインに基づく製品開発の研究—ウォータータンクを事例として, 日本デザイン学会第 5 支部 平成 29 年度研究発表会, 2017 年 10 月 22 日

姜昱健, 応夢, 李璐, 尾方義人,, レジリエンスデザインに基づく製品開発の研究, 日本デザイン学会第 5 支部 平成 29 年度研究発表会, 2017 年 10 月 22 日

西村英伍, 辻本寛治, 藤田萌花, 中島孝明, 江頭優佳, 能登裕子, 藤智亮, 尾方義人, 綿貫茂喜,, 機械学習によるレジリエンス行動の抽出, 平成 29 年度日本生理人類学会研究奨励発表会, 2018 年 1 月

西村英伍, 辻本寛治, 藤田萌花, 江頭優佳, 中島孝明, 能登裕子, 大草孝介, 長津結一郎, 縄田健悟, 小崎智照, 藤智亮, 中村美亜, 尾方義人, 前田享史, 綿貫茂喜,, 未来の安心のための災害避難所に関するレジリエンスアシストサービスマットの可能性調査, 九州大学高等研究院・九州先端科学技術研究所研究交流会, 2018 年 1 月 29 日

広見怜, 尾方義人, ペット専用口座「ワンクバンク」ペットと飼い主のためのアプリと通帳, 九州大学共創発表会, 2018 年 2 月

広見怜, 尾方義人, 「南区のため池」をドッグランに。アジリティ開催と殺処分減へ, 九州大学共創発表会, 2018 年 2 月

中島孝明, 西村英伍, 江頭優佳, 尾方義人, 藤智亮, 綿貫茂喜,, 創造的活動時の発想に対する評価を反映する生理指標の検討, 平成 29 年度日本生理人類学会研究奨励発表会(九州地区), 2018 年 2 月 3 日

西村英伍, 辻本寛治, 藤田萌花, 中島孝明, 江頭優佳, 能登裕子, 藤智亮, 尾方義人, 綿貫茂喜,, 機械学習によるレジリエンス行動の抽出, 平成 29 年度日本生理人類学会研究奨励発表会(九州地区), 2018 年 2 月 3 日

西村英伍, 元村祐貴, 尾方義人, 勝沼り, 吉村道孝, 三島和夫,, 機械学習を用いた動画からの生体情報抽出技術の開発：上眼瞼の動き検出に用いた一例, 日本生理人類学会第 77 回大会, 2018 年 6 月 17 日

西村英伍, 尾方義人,, プロクセミクスと F 陣形に基づく集団内の成員のレジリエンス指標の検討, 日本デザイン学会第 5 支部 平成 30 年度研究発表会, 2018 年 10 月 13 日

福田佑輝, 尾方義人,, ゲームキャラクターの開発方法についての研究, 日本デザイン学会第 5 支部 平成 30 年度研究発表会, 2018 年 10 月

河内厚志, 鶴真由子, 尾方義人,, 玩具の数理的研究, 日本デザイン学会第 5 支部 平成 30 年度研究発表会, 2018 年 10 月

藤田萌花, 尾方義人,, 行動観察およびその分析の実装方法の研究, 日本デザイン学会第 5 支部研究, 2018 年 10 月

広見怜, 尾方義人,, 音響工学と感性工学の両面からの音響機器の印象評価に関わる研究, 日本デザイン学会第 5 支部大会, 2018 年 10 月

姜昱健, 尾方義人,, 筆記補助具の操作性の評価方法, 日本デザイン学会第 5 支部 平成 30 年度研究発表会, 2018 年 10 月

(論文、口頭)
高 品, 江頭 優佳, 三舛 悦人, 尾方 義人,, レジリエンスデザインとしての環境の構築—廃棄物である「茶木」の再生利用による、エネルギー効率化と環境保護の研究, 日本デザイン学会第 4 支部 平成 29 年度研究発表会, 2018 年 1 月

(ポスターセッション)
西村英伍, 尾方義人,, 画像処理を用いた被災者のレジリエンス行動の生態学的観察, 九州大学教育改革シンポジウム 2017, 2017 年 7 月 10 日

西村英伍, 辻本寛治, 藤田萌花, 江頭優佳, 中島孝明, 能登裕子, 大草孝介, 長津結一郎, 縄田健悟, 小崎智照, 藤智亮, 中村美亜, 尾方義人, 前田享史, 綿貫茂喜,, 未来の安心のための災害避難所に関するレジリエンスアシストサー

ビス実装の可能性調査, 九州大学高等研究院・九州先端科学技術研究所研究交流会, 2018 年 1 月 29 日

緒方卓也, 尾方義人,, 戯曲の設計 —ラッキー・アンラッキーは不幸な男の子-, 日本デザイン学会第 5 支部 平成 30 年度研究発表会, 2018 年 10 月 13 日

【その他】
<受賞>
糸島市市営渡船 ひめしま シップ・オブ・ザ・イヤー 小型船舶門賞 2017 年

自動車デザインの指導に対し 中国自動車创意设计大賞 優秀指導教師賞 2018 年

朝倉災害復興支援あさくら杉おきあがりこぼし展実行委員会, あさくら杉おきあがりこぼしを活用した展示会及び一連の地域活性化の取組, 第 20 回福岡デザインアワード金賞, 2018 年 10 月 30 日、31 日 展示会

朝倉災害復興支援あさくら杉おきあがりこぼし展実行委員会, 朝倉災害復興支援 あさくら杉おきあがりこぼし展, ウッドデザイン賞 2018 ソーシャル部門入賞, 2018 年 10 月

西村英伍, 李東海, 尾方義人,, 被災地におけるレジリエンスデザインに関する研究, 地区防災学会論文奨励賞, 2019 年 3 月

<発表>
高品, 尾方義人,, 廃棄物である「茶木」のリサイクル, 九州大学記者会見, 2017 年 12 月 15 日

中村奈桜子, 尾方義人,, キャッシュレスの支払い方法の認知度を高める番組企画, 2018 年度工業設計プロジェクト演習(外部へ発表), 2019 年 2 月 1 日発表

<ワークショップ>
鶴真由子, 末吉孝, 中村奈桜子, 尾方義人,, 杷木小学校 朝倉おきあがりこぼしワークショップ, あさくら杉おきあがりこぼしを活用した展示会及び一連の地域活性化の取組, 2018 年 9 月 14 日

<メディア掲載>
朝日新聞・西日本新聞 レジリエンス 熊本地震調査の記事 2017 年 3 月

西日本新聞 レジリエンス 熊本地震調査の記事 2017 年 3 月

大学ジャーナル レジリエンス 熊本地震調査の記事 2017 年 3 月

朝日新聞・西日本新聞 授業「九州の防災」 2017 年 4 月

NHK 授業「九州の防災」の紹介 1. 2017 年 4 月

NHK 授業「九州の防災」の紹介 2. 2017 年 4 月

NHK レジリエンスアシストデザイン研究の紹介 2017 年 4 月

NHK・FBS 災害流木再生プロジェクト 2017 年 8 月

FBS めんたいプラス・めんたいワイド 災害流木再生プロジェクト 2017 年 9 月

NHK ニュースシブ五時 災害流木再生プロジェクト 2017 年 10 月

TVQ『news ふくおかサテライト』・BS『めんたいプラス』・RKB『今日感ニュース』・TNC タ方のニュース 「あさくら杉と 21 のプロダクト」展 2017 年 12 月

朝日新聞・西日本新聞 「あさくら杉と 21 のプロダクト」展 2017 年 12 月

RKB ロボメカ・デザインコンペ 2017 年 12 月

西日本新聞 学生・シニア共創プロジェクト 2018 年 3 月

西日本新聞 企業連携事業（西日本 FH スマホアプリ）2018 年 3 月

NHK 防災ステーション 2018 年 5 月

毎日新聞 西部夕刊・日本経済新聞・読売新聞夕刊・九州大学財務レポート 2018 (P.18) 鶴の起き上がりこぼし 2018 年 5〜7 月

西日本新聞 おきあがりこぼし「ホークスファミリー」デザイン 2018 年 7 月

共同通信 47NEWS、ロイター、愛媛新聞、沖縄タイムス、下野新聞、河北新報、岩手日報、岐阜新聞、宮崎日日新聞、京都新聞、高知新聞、高知新聞、佐賀新聞、山陰中央新報、山陽新聞、山梨日日新聞、四国新聞、秋田魁新報、上毛新聞、信濃毎日新聞、新潟日報、神戸新聞、西日本新聞、静岡新聞、千葉日報、大阪日日新聞、大分合同新聞、大分新聞、中国新聞、中日新聞、東奥日報、東京新聞、徳島新聞、日本海新聞、福井新聞、福島民報、福島民友、北海道新聞、北日本新聞、琉球新報,, 九州豪雨 1 年でシンボ、福岡市 住民連携し早期避難を 2018 年 7 月

産経新聞 住民連携し早期避難を 九州豪雨受け福岡でシンポジウム 2018 年 7 月

毎日新聞 九州北部豪雨 1 年 地域の防災力高めよう 避難や復興 識者ら意見交換 2018 年 7 月

KBC・RKB 九州豪雨から 1 年 地区防災シンポジウム 2018 年 7 月

毎日新聞・西日本新聞・朝日新聞・毎日新聞・産経新聞・読売新聞 おきあがりこぼし展福岡展 2018 年 8〜9 月

NHK ニュース・RKB ニュース・RKB『今日感モーニング』・KBC『トビダス KBC』 おきあがりこぼし展福岡展 2018 年 9 月

コミてん ラジオ出演 おきあがりこぼし展北九州展 2018 年 9 月

毎日新聞 おきあがりこぼし展北九州展 2018 年 9 月

毎日新聞・西日本新聞 おきあがりこぼし展売上金寄付について 2018 年 10 月

西日本新聞 授業「企業と協力しキャッシュレス社会の課題解決に取り組む」2018 年 10 月

西日本新聞 キャッシュレスデザイン授業について 2018 年 10 月

藤智亮

【論文】
藤 智亮, 立石 憲治. 育児支援のための揺動型電動ベビーベッドの設計および効果の検証, 日本設計工学会誌 設計工学, 52(4), 217-228, 2017

尾方 義人, 西村 英伍, 江頭 優佳, 藤 智亮, 綿貫 茂喜. レジリエンスデザイン方法試論ーこれまでのレジリエンス研究の実績に基づいた方法論の構築に向けて, 九州大学大学院 芸術工学研究院 紀要 (芸術工学研究), 26, 15-18, 2018

【学会発表】
< 国内発表 >
西村 英伍, 辻本 寛治, 藤田 萌花, 江頭 優佳, 中島 孝明, 能登 裕子, 大草 孝介, 長津 結一郎, 縄田 健悟, 小崎 智照, 藤 智亮, 中村 美亜, 尾方 義人, 前田 享史, 綿貫 茂喜. 未来の安心のための災害避難所に関するレジリエンスアシストサービス実装の可能性調査. 九州大学高等研究院・九州先端科学技術研究所 研究交流会, 2018 年 1 月

西村 英伍, 辻本 寛治, 藤田 萌花, 中島 孝明, 能登 裕子, 大草 孝介, 長津 結一郎, 縄田 健悟, 小崎 智照, 藤 智亮, 中村 美亜, 尾方 義人, 前田 享史, 綿貫 茂喜. 未来の安心のための災害避難所に関するレジリエンスアシストサービス実装の可能性調査. 九州大学エネルギーウィーク 2018, 2018 年 1 月

西村 英伍, 辻本 寛治, 藤田 萌花, 中島 孝明, 江頭 優佳, 能登 裕子, 藤 智亮, 尾方 義人, 綿貫 茂喜. 機械学習によるレジリエンス行動の抽出. 平成 29 年度日本生理人類学会研究奨励発表会 (九州地区), 2018 年 2 月

中島 孝明, 西村 英伍, 江頭 優佳, 尾方 義人, 藤 智亮, 綿貫 茂喜. 創造的活動時の発想に対する評価を反映する生理指標の検討. 平成 29 年度日本生理人類学会研究奨励発表会 (九州地区), 2018 年 2 月

藤 智亮. 社会実装とレジリエンスデザイン研究について. 九州大学応用生理人類学研究センター レジリエンスデザイン研究特別講演会, 2018 年 3 月

亀岡 瑠璃, 藤 智亮. ICT を活用した避難所の状況把握のためのシステム提案. 九州大学応用生理人類学研究センター レジリエンスデザイン研究特別講演会, 2018 年 3 月

岸田 文, 中島 孝明, 大草 孝介, 能登 裕子, 藤 智亮, 尾方 義人, 綿貫 茂喜. 個人の特性に応じた防災教育の基礎的検討. 日本生理人類学会第 77 回大会, 2018 年 6 月

藤 智亮. ICT を利用した避難所の人数・物資把握について. 2018 年度第 1 回地区防災学会シンポジウム, 2018 年 7 月

岸田 文, 本井 碧, 西村 英伍, 尾方 義人, 藤 智亮, 大草 孝介, 綿貫 茂喜. 援助要請行動の抑制要因と性格特性の関連ー役所への負の印象に着目してー. 日本生理人類学会第 78 回大会, 2018 年 10 月

藤 智亮. 認知症予防と行動計測. 応用生理人類学研究センターレジリエンスデザイン部門研究会, 2019 年 2 月

縄田健悟

【論文】
有吉美恵・池田浩・縄田健悟・山口裕幸. ワークモチベーションの規定因としての社会的貢献感：トラブルが求められる職務を対象とした調査研究 産業・組織心理学研究. 32:1, 2017

有吉美恵・池田浩・縄田健悟・山口裕幸. 定型業務がワークモチベーションを抑制する心理プロセス：職務意義の媒介効果. 実験社会心理学研究, 58:1, 2017

秋保亮太・縄田健悟・池田浩・山口裕幸. チームの振り返りで促進される暗黙の協調：協調課題による実験的検討. 社会心理学研究. 34:2, 2018

【学会発表】
< 国内発表 >
縄田健悟. 暴力における集団性の特徴は何か 暴行・傷害・リンチ事件の新聞記事に対する計量テキスト分析による検討. 日本心理学会第 82 回大会, 2017

縄田健悟・山口裕幸・青島未佳. チームの“阿吽の呼吸”を支える対人交流記憶システム 企業チームにおける日常的コミュニケーション, ノウフー共有, 暗黙の協調. 日本社会心理学会第 58 回大会, 2017

縄田健悟・池田 浩・後藤凜子・青島未佳・山口裕幸. リーダーからメンバーへのプロアクティブ行動の波及効果 企業組織におけるチーム・ダイナミックスの視点から. 日本社会心理学会第 59 回大会, 2018

縄田健悟 テロリズム発生における社会心理学的メカニズム：集団間紛争の視点から (企画シンポジウム「テロリズムに対して心理学は何ができるのか (3)」), 日本心理学会第 82 回大会, 2018

山田クリス孝介

【論文】
Koami H, Sakamoto Y, Sakurai R, Ohta M, Imahase H, Yahata M, Umeka M, Miike T, Nagashima F, Iwamura T, Yamada KC, Inoue S. Thromboelastometric analysis of the risk factors for return of spontaneous circulation in adult patients with out-of-hospital cardiac arrest. PLoS One. 2017 Apr 5;12(4):e0175257.doi: 10.1371/journal.pone.0175257. eCollection 2017.

Koami H, Sakamoto Y, Yamada KC, Matsuda T, Nishi J, Nakayama K, Sakurai R, Ohta M, Imahase H, Yahata M, Umeka M, Miike T, Nagashima F, Iwamura T, Inoue S. What factor within the Japanese

Association for Acute Medicine (JAAM) disseminated intravascular coagulation (DIC) criteria is most strongly correlated with trauma induced DIC? A retrospective study using thromboelastometry in a single center in Japan. Eur J Trauma Emerg Surg. 2017 Aug;43(4):431-438. doi: 10.1007/s00068-016-0756-4.

Koami H, Sakamoto Y, Sakurai R, Ohta M, Imahase H, Yahata M, Umeka M, Miike T, Nagashima F, Iwamura T, Yamada KC, Inoue S. The efficacy and associated bleeding complications of recombinant antithrombin supplementation among intensive care unit patients. Thromb Res. 2017 Sep;157:84-89. doi: 10.1016/j.thromres.2017.06.035.

Nakamura-Taira N, Izawa S, Yamada KC. Stress underestimation and mental health literacy of depression in Japanese workers: A cross-sectional study. Psychiatry Res. 2018 Apr;262:221-228. doi: 10.1016/j.psychres.2017.12.090.

【学会発表】

< 国内発表 >

小早川 真衣子, 須永 剛司, 平野 友規, 山田 クリス孝介, 西村 拓一, 渡辺 健太郎. 現場参加型開発を展開するためのアプローチ「活動を基盤とするデザイン」2017 年度 人工知能学会全国大会 (第 31 回) . 2017 年 5 月

平野 友規, 丸山 素直, 小早川 真衣子, 山田 クリス孝介, 須永 剛司. 表現ワークショップによる仕事の R e - D e s i g n . 2017 年度 人工知能学会全国大会 (第 31 回) . 2017 年 5 月

ホープ トム, 山田 クリス孝介, 丸山 素直. Events and Patient Recognition with Electronic Medical Records. 2017 年度 人工知能学会全国大会 (第 31 回) . 2017 年 5 月

山口 真由美, 宮之下 さとみ, 原田 由美子, 藤満 幸子, 山田 クリス孝介, 渡辺 健太郎, トム ホープ, 小早川 真衣子, 須永 剛司. 電子カルテがもたらした看護への影響. 日本デザイン学会研究発表大会. 2017 年 6 月

平野 友規, 丸山 素直, 小早川 真衣子, 山田 クリス孝介, 須永 剛司. 表現ワークショップによる仕事の R e - D e s i g n . 日本デザイン学会研究発表大会. 2017 年 6 月

宮之下 さとみ, 藤満 幸子, 原田 由美子, 山口 真由美, 梶島 久美子, 山田 クリス孝介, 須永 剛司, 小早川 真衣子, 丸山 素直. 看護体験を表現する作文・新聞ワークショップの検証. 日本デザイン学会研究発表大会. 2017 年 6 月

木村 健太, 井澤 修平, 山田 クリス孝介, 城月 健太郎. 唾液中コルチゾール値は逆転学習における意思決定と関連する. 日本感情心理学会. 2017 年 6 月

山田 クリス 孝介, 赤松 幹之, 石橋 基範, 笠松 慶子, 下村 義弘, 村木 里志, 横井 元治, 吉武 良治, 榎原 毅. 日本人間工学会 (JES) に対する意識調査. 日本人間工学会第 58 回大会. 2017 年 6 月

村木 里志, 赤松 幹之, 石橋 基範, 笠松 慶子, 下村 義弘, 山田 クリス 孝介, 横井 元治, 吉武 良治, 榎原 毅. 学会員の属性の動向分析. 日本人間工学会第 58 回大会. 2017 年 6 月

吉武 良治, 赤松 幹之, 石橋 基範, 笠松 慶子, 下村 義弘, 村木 里志, 山田 クリス 孝介, 横井 元治, 榎原 毅. 若手人材にとって学術大会をより魅力ある形にするために何ができるか? 日本人間工学会第 58 回大会. 2017 年 6 月

榎原 毅, 赤松 幹之, 石橋 基範, 笠松 慶子, 下村 義弘, 村木 里志, 山田 クリス 孝介, 横井 元治, 吉武 良治. 多様化する学術ニーズに応える学会改革アクションプランの概要. 日本人間工学会第 58 回大会. 2017 年 6 月

小網博之, 阪本雄一郎, 櫻井良太, 太田美穂, 今長谷尚史, 八幡真由子, 梅香満, 三池 徹, 永嶋 太, 岩村高志, 山田クリス孝介, 井上 聡, 山村 仁, 川副 友, 宮本恭兵, 太田好紀, 森本 剛 (17 人中 11 人目) . 敗血症性 AKI における腎代替療法の効果を再考する: DESIRE サブ解析から. 第 45 回日本救急医学会総会・学術集会. 2017 年 10 月

山田クリス孝介, 山下和也, 櫻井瑛一, 本村陽一, 阪本雄一郎. 臨床研究で利用可能な匿名加工情報の作成手法. 第 45 回日本救急医学会総会・学術集会. 2017 年 10 月

藤井 進, 野中小百合, 山田クリス孝介, 加藤省吾, 森川和彦, 矢作尚久, 末岡榮三朗, 阪本雄一郎. 異なる PHR システム連携における問題と課題の考察.

第 37 回医療情報学会連合大会 (第 18 回日本医療情報学会学術大会) . 2017 年 11 月

野中小百合, 藤井 進, 原めぐみ, 山田クリス孝介, 南雲文夫, 栗山 猛, 矢作尚久, 末岡榮三朗, 中島直樹, 康 東天. 複数の大規模医療情報データベース間で統合解析するための連携手法について: MID-NET と小児と薬情報収集システム. 第 37 回医療情報学会連合大会 (第 18 回日本医療情報学会学術大会) . 2017 年 11 月

丸山 素直, 須永 剛司, 小早川 真衣子, 平野 友規, 山田 クリス孝介, 渡辺 健太郎, 西村 拓一, 藤満 幸子. 「看護のこころ」を引き出す表現活動のデザイン. 2018 年度日本デザイン学会秋季企画大会. 2018 年 10 月

外部研究資金一覧

環境適応部門

競争的資金

- 2013年度～2017年度, 基盤研究(A), 代表, 「ゲノム情報・生理的多型性・行動からみた光環境における遺伝的及び可塑的適応性の評価」(安河内朗)
- 2014年度～2017年度, 基盤研究(B), 代表, 「寒冷曝露時の熱産生反応からみた生理的多型性の検討」(前田享史)
- 2015年度～2017年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「ヒト褐色脂肪活性の簡易評価手法の検討」(前田享史)
- 2015年度～2017年度, 挑戦的萌芽研究, 分担, 「汗腺に関わる固有の遺伝子とヒトの発汗調節機能との関連」(前田享史)
- 2018年度～2020年度, 基盤研究(B), 代表, 「低圧低酸素および寒冷環境に対する循環調節系の適応反応とその多型性」(前田享史)
- 2018年度～2020年度, 基盤研究(B), 分担, 「先住民の視点からグローバル・スタディーズを再構築する領域横断研究」(瀬口典子)

企業との共同研究

- 2017年度, パナソニック株式会社 アプライアンス社, 「冬季における寝室の空調制御と照明制御の効果検討」(前田享史)
- 2017年度, 清水建設株式会社, 「CO₂が人に及ぼす生理的影響に関する共同研究」(前田享史)
- 2017年度～2018年度, 株式会社ノーリツ, 「寒冷環境における入浴行為による身体負担と血圧変動および心理反応についての研究」(前田享史)
- 2018年度, パナソニック株式会社 アプライアンス社, 「夏季における寝室の空調制御と照明制御の効果検討」(前田享史)
- 2018年度～2019年度, デロンギ・ジャパン株式会社, 「気流が人体に与える影響の研究」(前田享史)

- 2018年度～2019年度, 大阪大学・ダイキン工業, 「Felicitas 環境の構築—人の生理学的特性に基づいて環境制御を行うための評価技術と制御技術に関する研究」(前田享史)

アクティブライフ部門

競争的資金

- 2016年度～2019年度, 挑戦的萌芽研究, 代表・分担, 「高齢者の特性と家庭内転倒リスクを考慮した衣服型ウェアラブル端末の開発と検証」(代表: 能登裕子, 分担: 村木里志)
- 2016年度～2019年度, 基盤研究(A), 分担, 「高齢者の介護予防コミュニティ形成を支援するオンラインゲームデザイン研究」(村木里志)
- 2017年度～2021年度, 基盤研究(A), 代表, 「身体動作能力を拡張するテクノロジーに対する人間の適応性の理解とその応用」(村木里志)
- 2017年度～2020年度, 基盤研究(C), 分担, 「発育期における下肢および大腰筋の発育と疾走能力の発達との関係」(村木里志)
- 2018年度～2020年度, 若手研究, 代表, 「Investigation of hand tool and upper limb muscles activity on median nerve compression at the wrist」(Loh Ping Yeap)

ヒューマニティ部門

競争的資金

- 2017年度～2018年度, 新学術領域研究「個性」創発脳 公募研究, 代表, 「色覚の多様性からとらえる個性の総合的研究」(平松千尋)
- 2017年度～2018年度, 京都大学 霊長類研究所 共同利用・共同研究, 代表, 「霊長類における音声コミュニケーションの進化および発達過程の研究」(平松千尋)

- 2017年度～2019年度, 挑戦的研究(萌芽), 代表, 「子どもの高い光感受性と概日リズムを考慮した夜の光環境の指針開発に向けた研究」(樋口重和)
- 2017年度～2020年度, 基盤研究(B), 分担, 「子どものメラトニン分泌パターン改善に直結するシンプル・ストラテジーの提案と実践検証」(樋口重和)
- 2017年度～2020年度, 基盤研究(C), 代表, 「社会集団標識としての言語音声特徴の異同検出とその基盤: 行動生態学的背景と発達」(橋彌和秀)
- 2017年度～2020年度, 基盤研究(B), 分担, 「承認をめぐる間主観性の発達に関する研究」(橋彌和秀)
- 2018年度, 若手研究(B), 代表, 灌流スピンラベリングを用いた脳血流量測定による脳の概日リズムと全身的協関の解明. (元村祐貴)
- 2018年度～2019年度, 新学術領域「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」公募班代表, 「美しい／かわいい／不気味: 顔情報変異の布置を用いたヒト普遍性／文化間変異の検討」(橋彌和秀)
- 2018年度～2020年度, 挑戦的研究(萌芽), 代表, 「色と温かさの対応の獲得過程の解明」(平松千尋)
- 2018年度～2021年度, 基盤研究(C), 分担, 「子どもの認知プロセス環境要因を考慮した親・保育者・一般成人の比較」(橋彌和秀)

企業との共同研究

- 2013年度～2017年度, 株式会社ファンケル, 「概日時計に及ぼすL-セリンの影響に関する研究」(樋口重和)
- 2016年度～2018年度, 大日本印刷株式会社, 「有機ELディスプレイを対象とした感性・脳科学的アプローチに関する研究」(樋口重和)
- 2017年度～2018年度, 宇宙航空研究開発機構(JAXA), 「特異作業実施場所における照明環境改善研究」(樋口重和)
- 2018年度, パナソニック株式会社, 「入眠支援ゆらぎ照明に関する研究」(樋口重和, 元村祐貴)
- 2018年度, 正興ITソリューション株式会社, 「リハビリ用シリアスゲームの開発、及びその検証・評価」(松隈浩之)

- 2018年度, パナソニック株式会社, 「MRI/EEGを用いた入眠の脳内機序に関する研究」(元村祐貴, 樋口重和)

レジリエンスデザイン部門

競争的資金

- 2015年度～2017年度, 基盤研究(B), 代表, 「地域救急医療の質の向上に資する科学的証拠の構築に関する研究」(山田クリス孝介)
- 2015年度～2018年度, 基盤研究(C), 分担, 「大規模医療情報基盤を利用した敗血症の治療に関する医療経済学的分析と評価」(山田クリス孝介)
- 2015年度～2018年度, 基盤研究(B), 代表, 「子育て支援プロダクト創出のための科学的エビデンスの構築」(藤智亮)
- 2016年度～2018年度, 基盤研究(B), 分担, 「ケアリングの実践知を日常的に共有するための支援モデルの構築」(山田クリス孝介)
- 2016年度～2019年度, 基盤研究(C) (特設分野・紛争研究), 代表, 「社会的紛争における暴力誘発装置としての集団: “集団心理” の実証的検討」(縄田健悟)
- 2017年度～2020年度, 基盤研究(A), 代表, 「現代人の生理機能とゲノム解析から探る寒冷適応能と免疫機能の共進化」(綿貫茂喜)

企業との共同研究

- 2017年度, 株式会社サムライト, 「認知機能のレジリエンス向上のためのコンテンツ開発に関する研究(3)」(藤智亮, 尾方義人)
- 2018年度, 株式会社ジェイアール西日本新幹線テクノス, 「医療・介護施設における聞こえ補助具の工業設計・音響設計に関する研究」(尾方義人, 藤智亮)
- 2018年度～2020年度, 喫煙科学研究財団助成研究, 代表, 「喫煙は集団や社会の中での人間関係構築に貢献するか?」(綿貫茂喜)

応用生理人類学研究センター年報（2017-2018 年度）

発行日：2020 年 3 月 15 日

編集発行：九州大学大学院芸術工学研究院附属 応用生理人類学研究センター
〒 815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1

九州大学大橋キャンパス 応用生理人類学研究センター事務局

E-Mail： parc@design.kyushu-u.ac.jp

URL： <http://www.parc.design.kyushu-u.ac.jp/>



Ⅲ 応用生理人類学研究センター

PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY RESEARCH CENTER

〒815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1 九州大学大学院芸術工学研究院

<http://www.parc.design.kyushu-u.ac.jp/>